
BIO HAZARD evolutionbreak[DEAR FILE]

シンラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B I O H A Z A R D e v o l u t i o n b r e a k 「 D E A
R F I L E 」

【Nコード】

N1036Y

【作者名】

シンラ

【あらすじ】

1998年12月、T・ウィルスの恐怖が薄れ始めた頃。その街はすでに悪夢と変わっていた…！情報が漏らされないように閉鎖されたその街にある1人の青年が任務によって送り込まれる、その青年はカゲハ。これは彼の成長を記した物語である。

諸事情によりアカウントが変わってしまいましたが前にこの作品を

描いた作者です。作品の管理の為、もう一度投稿させてもらいます
がご了承ください。

任務「1」 離脱（前書き）

えー、前のアカウントがわからなくなっしまいました・・・（汗）
作品管理の為、再び投稿させてもらいますがいくつかの編集はして
います。読んでもらえると光栄です。

原作に触れない物語としてこの作品は進んでいきます。

カゲハは普通の主人公ではありません。闇を抱え、闇に突き進む。
そんな主人公です。

任務「1」 離脱

〓〓1998・10月〓〓

トウイルス流出により街全体が汚染

米軍が核爆弾に相当するミサイルを打ち込む滅菌作戦が実行され近代都市ラクーンシティーは壊滅した。

真実は隠蔽され、まさに証拠隠滅と言っているほどのこの事件は後々に世界中を混乱に陥れる
しかし、これは始まりに過ぎなかった

1998年 12月

ある1人の青年がいる。

彼の名はカゲハ・A・ジュティム

フランス人と日本人のハーフで、彼の在住していた所はずっとフランスだった

見た目は日本人だが中身はフランス人、彼の母親が日本語を教えながら暮らしていた。

そんな彼は今、ラクーンシティーの姉妹都市dearシティーで各国の警察のエリートを集めるプロジェクトに参加していた。

研修に参加をよぎなくされさたのは当時彼は日本の自衛隊に属して

いたこともあり、フランスと日本の国籍を持つエリートとされていたからだ。

そして彼はそのよりすぐれた経歴で日本からの派遣としてDearシティーへの派遣を命じられたのだった。

「Dearシティー」というのは米国のやや北側にある国で孤立した街でありながらその圧倒的な開発力でのし上がった近代都市で、バックには世界有数の有名企業アンブレラ薬品会社が着いている

フランス国籍の彼は今、日本からの特別な待遇を受け自衛隊に所属していた。

そう

それが今、彼として成り立っている表の顔

- - - 彼は「ある人」の部下

だが彼には「ある人」の所在など知らなかった。彼は任務を言い渡されただけでむしろこれが「ある人」の組織の入団テストのようなものだった

彼の知り合いのハンクという男の情報ではロックフォード島に行ったということを知っている・・・

今回彼に課せられた任務は dear シティに潜入し、あるウイルスのサンプルを回収することそのあとすみやかに脱出する

彼は ある人 の忠実な部下

彼は ある人 の武器

彼は ある人 がいるから存在する

そして、これからどういうことが起きるかは予想はつく

これから始まる彼にまつわるこのレポートは彼にとって大きく変化をもたらす

任務にあった”あるウイルスのサンプル”は彼にはとてつもない因縁が存在する

そんな彼の正体、今から始まるのは彼の新たな人生の始まりでもあるのだから

12月、寒い冬であるが彼はその自衛隊の仲間たちと共にへりに乗り込む

自身の信じきる信念と計画を一緒に乗せ…

空気がとても冷たい地域、ラスゴ山脈は高さこそないが車でくるにはあんまりお勧めできない

アメリカの基地に到着してからへりに乗せられ、操縦士含め総員24人は日本人だった

ただ、数人ほど除いては・・・

その一機に乗るカゲハ・A・ジュティムは現在へりで移動しているこれから向かうdearシティーはラクーンシティーに継ぐ近代都市で、もちろんアンブレラがすべてを支配していた。

建物から扱うものまで、人々はそれを疑問とも思わず暮らしていた。

霧で覆われたこの街は四方に巨大な壁で覆われ

さらに街の周辺には高い山脈があり車で来れるような所ではない。

この街の人口は約60万人、いわば一つに独立した国みたいなものだ

だが毎年行われていたこのプログラムのおかげで世界からの信頼が高い。だが、こうゆう街こそ何をやってるかわからないものだ。主に呼び出されるのはまず優秀な警官や研究員、医療関係のお偉いさんなんてものも今回は呼び出されている（この部隊とは違う方法で）

今回日本からは合計24人派遣され、各八人ずつでチームに別れへりに一機ずつ乗り込んでいる

カゲハはヘリの2号機で待機中

まわりはみんな日本人で、それぞれ自分の席で待機

カゲハは自分の席に座りながら外を見ていた
とくになにもない外だが、時を待つのはちょうどいい。

ふと、隊員の一人が立ち上がった
そしてカゲハほうへ歩きだす。

（隊員の一人がこっちへ来る・・・なんだ？）

隊員の一人がカゲハがいる席の隣に座った

「おい、大丈夫か？いつになく顔が真剣だぞ」

こいつは同じ警官として派遣されたたしか：サメジマと言ったな。

「いや、大丈夫だ。なんともないよ」

「そうか？緊張しているんじゃないかと思ったよ、お前日本に来て

「からあんまり笑ったりしないからな」
ニカツとサメジマが笑う。この男はよくこうやって笑う、愛想笑いではない自然な笑いだ。

「そうかな？これから気をつけるさ」

ここで軽く笑ってみせる
もちろんこれは作り笑いだ

「まあ、そんな張りつめるなよ」
フツと優しそうな顔をし、また自分の席に戻ろうとする。サメジマにこの作り笑いが見抜かれたらしい。

サメジマはカゲハの肩をトンツと指で叩くと自分の配置についた

すると隊長が立ち上がり叫ぶ

「そろそろDearシティーだ！みんな準備しろ！」

窓をのぞくと街の入り口に巨大な壁があった。これがいわゆる住民を閉じ込める門だ。

それは街の周りを大きく囲い、これがあるために街へ入るにも出るためにもIDカードが必要とする

尚、街の出身者に関しては体のなかにマイクロチップが入っていて街での動きは衛星から見張られていた。

皮肉としかいいようがない街の住人には街のお偉いさんからは「君たちは町から守られているんだ安心したまえ」などと垂れごとをほざかれている、衛星からの監視で街の住人は犯罪などという概念は存在しない。いつ、どこで、なにをしているかなんて調べれば一発でわかられてしまうからだ

常に街の全体的に霧がかかっているがこれは気候の関係で一年の大半が雨でたいがい霧雨なので街全体は常に霧がかかっている。

そんな街の上空を飛びながら、みんなは外を見て話している。自衛隊にも海外に遠征することがあるがこういうとこに来るのは稀である。

しばらく街の真ん中あたりを飛んでいるとあまりにも乗員がうるさいのでコマザワが立ち上がり隊員達に注意をしようとしたその瞬間…

ビー

ビー

ビー

操縦席のほうのスイッチがけたたましい音を立てる。

カゲハは時計を見た

予定通りの警報音

「どつした!？」

隊長は操縦席に向かっていく。

だが操縦士が青ざめた顔で叫んだ。すでにグラグラとへりは揺れ、エンジンの音がいつそう激しく響き渡る。

「エ、エンジンに異常あります。ほ、本機は不時着します!!!」

悲鳴のような操縦士の声と同時に急に高度が下がり始めた

乗員はパニック状態になっている

………

「ズン」

……ザー

「どつした!？」

一号機からの通信だ喋っているのはバレラ隊長らしい

「エンジントラブルです」通信のサカキが言った

・・・

ザ・・・ザザ

「ザ、ザー…ど…たザー…よく聞…な」

雑音と同時にバレラ隊長の声は遠のいていく。急な電波障害でもあ
るのかそれ以降通じなくなった。

ブツッ

通信が途絶える。

ババババババババ

「おいおいおい、どこ行くんだよ。無視かよ……」

へりの音が遠ざかっていく

バレラ隊長の乗ったヘリは先に行ったらしい
こっちの安全が確認できたからなのか、こっちより優先することが
あったからなのかはわからない。もうヘリは見えないところまで行
ってしまった。

「…さあ、ヘリからでるぞ」
サカキはこれ以上この中に居ても無意味と悟ったのだろう。隊員達
を外に誘導する。

若干ほこりが舞っているがどこにもぶつける事無く不時着できたみ
たいだった。

隊員達はどこどころぶつけていたが幸いケガ人はいない

「それにしても霧が濃いな」
サメジマは霧の濃さにとても驚いていた。なんせ一面白いモヤが広
がっているのいるのだから仕方ない。

カゲ八はまわりを見回しながら進んでいる

ヒュンッ

「！」

突然カゲ八の前でなにか目の前を飛んでいく

「イタッ！」

誰かにそれが当たったらしい

「どうした？霧が濃くて何がどうなっただか見えないぞ？」

「だ、大丈夫です」

どうやらサメジマにカゲハの目の前を通り過ぎていったものが当たったらしい、特に何とも無いようだ

だが、この時サメジマの腕に何かにかまれた後がありそれをサメジマはその腕の部分をおもいきり掻き毟っていたことがカゲハは気になっていた

「そっか、なら先に進むぞ」

少し進むと街中へ出る、ビルこそないが古風なアパートが立ち並び妙に懐かしい所だった。

五分ほど歩き、隊員達は広場のようなところに入った。

「隊長…ちょっと…体が…」

サメジマが顔を蒼白にしてふらついている。

そんなサメジマを見た隊員達はその顔を見て驚いた
皮膚が所々かきむしったように荒れていて、顔は驚くほど白い

「おい、大丈夫か？」

コマザワがサメジマのほうへ駆け寄る

「さっき飛んできたヒルに咬まれた所が妙にかゆくて」

皆は首をかしげる

(ヒル？さっきのはヒルが飛んできてたのか？)

さつきカゲハを横切ったあの物体はヒルだったらしい

「……分かった学校にいたら検査を申し出てみよう」

「ありがとうございま……す？」

サメジマが言った途端にバタツと横に倒れた
鼻血を出し、瞳孔が開いている。

「だ、大丈夫か！？」

みんなが駆け寄る

「貧血か？」

「そんなヒルに咬まれた程度で」

「俺がおぶる、誰か荷物を持ってくれ」

隊長のコマザワがサメジマをおぶる

「少し急ぐぞ」

みんな小走りになって街の中を進んで行く

だが走っても走っても霧が濃くなっていくばかりでありあまり進んでいくようには思えなかった。

「まずい、脈が荒くなってきた」サメジマをおぶっているコマザワが言った

「なら病院に連れていこう。緊急だ」

「でもここらへんに病院なんて…」

隊員がそう言った瞬間
フツと人影が見えた

それも一人じゃない 自分達の周囲にたくさんいる

「あ、そつだ」

ひらめいたように隊員の一人がその人影に近づいていく。

なにが起こるか知らずに隊員は人陰のところに行き、ぎこちない英

語で喋り始めた・・・

そのゆらゆらと揺れる人影、それはカゲ八がよく知るものでもあった

「あ・・・こちらへんに病院はありますか？」

「……」

霧の中の人影は何も答えない
ゆらゆらと揺れているだけだ。

隊員はどこか間違った英語を使ってしまったか焦ったが特に問題はないはずと思いもう一度繰り返した。

「(？) すいません、こちらへんに病院はありますか？」

もう一度言ったが人影は同じようにただゆらゆらと揺れているだけだ。

「…」

「大丈夫ですか？」

あまりにも返答がないので隊員はもう一步近づいて言った。

ガッ!!

突然霧にまぎれた人影は隊員に覆い被さるように抱きつく。

先ほどのゆらゆらした動きからは想像できないような勢いで

「!?!?…え、なに？」

隊員はこの状況をまったく理解できず何もできない。

抱きついたのは男なのだが、さきほどから歩き方が変わったことはカゲ八だけが理解していた

カゲ八は抱きついている男の足を見た。その足は不自然なほど回転
して足先が背中の方を向いている

隊員達が啞然としている中、男の口が大きく開かれた。

「？」

ガッ

隊員の両肩を握りしめ首筋にかぶりつく。

「!?!?!」

口の奥のほうまでがつちり噛み付いている。その時の男の目はもはや人間からかけ離れたものだった。血走った目、もはやどこを見ているのかすらわからないくらい瞳孔が開いていた。

噛み付く歯は首の肉に食い込み、のど笛のほうまで噛み付いたところで男はいつきに顔を引き戻す。

肉は食いちぎられ、不自然な皮膚の「ベリッ」って音が離れていてもよく聞こえた。

首からは鮮血が飛び散る。食いちぎった断面からは筋肉のような赤黒いものが見えた。

その不可解な人物は隊員の身体を二口目、三口目、と貪っていく。

隊員達はただ目の前の信じられない光景を呆然と眺めていた。隊員は声にならない声を出しながら目を見開き、遅れてやってくる痛みと全身の痙攣が同時に襲う。

バタン

ブシューーーーーー

かまれた隊員は血しぶきを上げながら地面に倒れた。

「ア…ア…アア…」

グチャ、バリ…バリ…バリ…

隊員の首を必死に貪っている街の住人と思われる男

その倒れた隊員の血塗れの顔を見た隊員達の体からいつきに血の気

が引く

「う、うわああ！！！！！」

「化け物だあああああ」

一人が叫び、それに触発されたように他の隊員も叫ぶ。まるで端から恐怖が伝染していくようにパニック状態になっていく。コマザワは動揺する隊員を落ち着かせようと大声で叫んだ。

「落ち着け！！落ち着くんだ！！」

「ひいひいひい！！」

ついに隊員達は逃げようと走りだしたもはや尿が漏れ出していることなんて気にしなかった。

「待て！！どこへ行く！？」

隊員の一人が霧の中へ逃げこもうと走る

ガッ

だが、逃げようとした隊員の腕を何かがつかんだものすごい力によって走りは中断された。

「へ？」

その腕の先、まるで狂気に侵された恐ろしい顔の街の住人がいた。
こんどは男や女もいる。
顔は驚くほど蒼白で、血まみれの人もいる。だが、外見は普通にありふれた一般人だ。

しかし所々に噛み傷がある。衣服は鮮血が飛び散り、内臓がこぼれている者もいた。

再び悲鳴

その声は絶望に満ち逃げられない痛みが体全体に襲う。
それぞれ逃げた隊員を5、6人で囲み、次々とその醜悪な歯と爪が隊員の体を捉えていった

「あああああああああ！！！！！！！」

「ウア…ガア」

「嫌だ！痛い、痛い、いたあああ、あ、あ、あ……」

ボリ……ガリガリ……ゴキ……グチュグチュグチュ……

コマザワはさすがにこの街の異変に気付く

「しまった！お前ら密集隊形を取れ！！」

霧が濃く

人気のなかった街中で次々と人影が増えていく…

悪夢の再来

それは、この中でカゲ八のみが知る真実だった

サメジマをおぶったサカキは今起きている状況に必死に対応しようとしているが、けっして冷静にはなれてない
だが無理もなかった、人が人を食べるなんてホラー映画にしかない
ことであり現実には考えられないことだった。

うつろな目に血塗れの衣服

歯をむき出しにして襲ってくるその姿は”名演技”なんて言っている場合じゃなかった

握力は人間と思えないほど強く

銃弾をもともせずに向かってくるその姿は人をさらに恐怖へ導く

囲まれていく隊員たちは一人、また一人と数を減らしていく

「クソ！こいつらそこらじゅうにいるぞ」

「いかれてるこいつら、人を食うなんて」

青ざめた顔の隊員達、もう数えるほどしか生き残ってはいなかった。密集隊形をとったのはいいが、それはどんどん囲まれていくことが目に見えていた。次々と増えていく狂人達、もう成す術がなかった。その密集体系をとっていたグループにいたカゲ八が言った。

「…銃を抜け」

その言葉に隊員達はさらに青ざめた。

異国に来てその住民に発砲するなどもつてのほかであったからだ。

「え…カゲ八それは…」

カゲ八はとまどう隊員達を睨む。

「たとえこいつらが民間人だとしても上層部はこの状況を分かっているはずだ」

「しかし！」

「“正当防衛だ”、すべてそれで成り立つ。お前は死にたくないだろっ？」

その一言で全員が銃を抜いた

狂人たちは霧の中から次々と現れる

「くらえ!!」

隊員の一人が発砲する

だが少しよろけただけでなにくわぬ顔で向かってくる
いや、なにくわぬ顔というよりも、そんな顔の皮がないものだって
いる

「た、倒れない…?」

続けて二発、三発と体に撃ち込んでいく

「クソ!」

ついに弾がなくなるともはや成す術がなかった。

「来るな…こっちへ来るな!」

「うわああ・・・」

悲鳴、また悲鳴その悲鳴により集まっていく狂人達
次々と味方はやられていった。

だが、その中で一つのエリアだけまわりの生ける屍が地面に突っ伏
していく

そう、カゲハは冷静に生ける屍たちを倒していったのだ

頭を狙えばいい

カゲハはわかっていた。

こういう事態への対処、行動

任務を任された理由はこれにあつたのだ。

「クソ！きりがない、みんな撤退だ！聞こえてるか！？」 コマザワ
が言った

「・・・」
返事が無い。聞こえるのは狂人たちの呻き声だけだった。
そう、コマザワのまわりにはもう生きている者はいない

「！」
だが少し離れた所で銃声が聞こえた

カゲハだ

コマザワはサメジマをおぶって銃声の聞こえる方へ走っていった

「カゲハ！無事だったか、撤退だ離脱するぞ」

コマザワ隊長がそういうとカゲハは顔をしかめた。

「・・・サメジマをおぶってですか？邪魔になりますよ」

その言葉に何を意味しているのかはコマザワにはすぐわかった。

「仲間は捨てられない！これはどこの世界でも一緒だカゲハ！」

コマザワは叫ぶ。

「仲間は時に裏切ります」

カゲハは冷静に言った

「なんてことを言うんだ！！」

コマザワの怒りは限界に達するその瞬間

ガバツ！！！！！！

いきなりサメジマの顔が勢いよく上がった
急にサメジマが起きたのだ

「だ、大丈夫なのか？サメジマ」

「そう今この瞬間も・・・な」

カゲ八には分かっていた。
それがなんなのか

一瞬ハンドガンへ手が伸びたがカゲ八はそれを押しとどめた

このときサメジマの眉間を撃たなかったのはカゲ八の敬意でもある
仲間を信じ続けた者へ対しての

「おい・・・大丈夫か・・・おい？」
なにも反応を示さないサメジマの視界には無抵抗の”餌”

カゲ八は振り返り路地裏へ走る、軽く薄ら笑いを浮かべながら
霧に消える悲鳴と共に...

任務「2」 地下の死闘（前書き）

まとめて更新するようになりました。

任務「2」 地下の死闘

街はとても静か。先ほどの出来事が嘘のように静かで、不気味であった。

路地裏に逃げ込んだカゲハは辺りを警戒しながら進んでいる

奴らは集団で動き、いちいち倒していても弾と時間を無駄にするだけだ

そんなことを聞かされていたカゲハは当初の目的地 dear シティ
I の最高峰の建造物
evolutionary school 「進化的な学校」へ

向かっている

今回派遣チームとして日本から研修に行く目的地はここだった。

この任務のなかでは集団行動だけは避けたかったカゲハはエンジン
トラブルを装いへりを墜落させた

全て計画の内だったが、この霧の中では下手に車などを運転して
いくと事故を起こす可能性があり、また騒ぎを起こすとゾンビたちが
集まってしまうという悪循環は避けたかった

じゃあ、なぜエンジントラブルを装ってまで街中へ降りたか

カゲハの誤算をした

それはこの街の霧の濃さと、ウイルスに犯された亡者たちの数である街には霧が常にあるとは聞いていたが、ここまでとは予想外だったそれといきなりT・ウィルス感染者と戦闘になるとは思っても見なかった、カゲハは霧にまぎれて消えるつもりだったのだ

「・・・しょうがない」

カゲハはため息をつきある方向へ向かった。

少し歩いてから腰に挿してある携帯端末を起動しDEARシティの地図を表示させた

チカチカと点滅している位置がカゲハ、その先に目指している所のマークが示されていた。

「ここらへんのはず・・・」

カゲハは地図をみた

地図は作戦前に調べたもので、ある程度は正確なはずであった

霧の濃い中で警戒しながら進む

すると少し広い入口に【 】と書かれた看板があった

地下へ続く階段があり、矢印の横には電車のマークが記してある

カゲハは軽くつぶやく

「これだけは避けたかったが…仕方ないな」

カゲハは階段の前まで来てサーチライトを点けた

まず階段の下を照らす、暗闇の中にはまさに闇そのものと言える静寂の空間が広がっていた

(…よし)

コツツ

コツツ

靴の音が響く、地下に向かう階段の一步一步に緊張が走る。

カゲハは辺りを見回しながら進む

今進んでいるこの場所は、【セント・カルネ駅】という地下鉄の駅でこの駅からは evolutionary school へ直
行の線路が伸びている

カゲハはこの駅のコンピューターにハッキングし、電車呼び寄せ
て学校へ向かうルートを選んだ。

真っ暗闇と閉鎖空間というかなり危険なルートだが、学校までの距離は
だいぶあるのでむしろ地上のほうが危険だった。

改札口と思われる所を抜け、ホームではない方向へ歩く

果てしない暗闇の中、またさらに下へ進む階段があり、壁に紙が貼
つてある

そしてもう片方の手には自身のものであるう家族の写真を掴んでいた。

（そうか…）

カゲハはその様を見て理解した。彼は自害の道を選んだのだ
悪夢から開放されるために・・・

「だが無理もない…」

カゲハはモニターのほうへ行き、駅構内の電源をONにする

モニターが順番に明るくなっていった

まず一番上のモニターにはカゲハが入ってきた入り口の周辺が映し
出された

かなり散らかっているが誰もいない、

次に2つ目のモニターを見る、改札があり少数だがゾンビ達がいる。
それと同じ数の死体も

次、3つ目のモニターを見る、ここはこの部屋のすぐそばの通路で
ある。

「!?!」

それには信じられないほどの大量の人影が映っていた。

まるでそれは普段からあったこの駅本来の姿のように

「・・・なぜだ？」

モニターに映っていたのはかなりの数のゾンビ達

だが、カゲハはついさっきこの通路を通ってきたはずだった

そう、カゲハは駅構内の電気を点けたことによってゾンビ達を”起こして”しまったのだ

闇の中からまた次々と現れるゾンビたち、この駅はショッピングモールと繋がっているためそこからやってきているのもいるのだろう。

「さて、どうするか」

カゲハは腰のベルトに差しこんでいた端末機を手に取りコードになく

・・・『connect ok 中枢コンピューターニハックシマス』

画面に線路図が表示される

線路の向きをevolutionary schoolへ向け、次に車両を駅に呼び戻す

「ここまで来るのに三分か、あと車両は…」

∴
∴
∴

∴……なんだ？目が覚めたぞアレ、なんでだろう俺は死んだハズナ
ノニ？ニニ？

アレカユイナ
ハラヘヘタ

ウウウマソウナニカイル

アソコ

イクタタタベタイイイイイ
イイイイイ……

? ? ! #

アア

イタイ

イタイ

イタイ イタ イタ イ

イ

イ

∴ア ア リリ ガト

「すまんな・・・借りる」

カゲハは床に転がる銃を拾う

バンツッ！

勢いよく扉を開けると食に飢えた亡者全員がこっちを向く
うつろとしたその目がカゲハに集中した。

「来い、化け物」

一斉にその目は生きた血肉を持つ者へ向けられ、その空腹を満たすべく歩きだす

そう

あくまでも（歩き）だすのだ。その者達は半径五メートル以内に近づいたならば容赦なく二度目の死を迎える

その風景はまるであの世へつながる送り火へ群がる死霊のようだった

その者は両手に銃を持ち、通る道すべてが死の道と分かっているが、進んでいく

カゲハはつい先程一人の男を生ける屍という呪縛から解放した。だが男にとってはそれが救済なのである

カゲハの手には男を現実という名の悪夢から解放させた銃

そしてその男を醜い亡者という呪縛から解放させた銃が握りしめられている

血肉を求める亡者たちの動きはその十字架を背負った青年には遅すぎた

弾丸眉間に貫き、亡者は倒れる。それを踏み台にしてまた亡者が襲いかかるうとするがまたその亡者の頭に穴が空く。

頭の中で自動的に数えられていく残段数、片方がゼロになったら片方のリロードのため銃を撃てなくなる。だがその瞬間にカゲハは亡者へ強烈な蹴りを入れひるませる、その瞬間にリロードを繰り返してた。

「よし」

ホームに着いたがまだ電車は来ていない
だがゾンビたちは限りなく溢れてくる

カゲハは時計を見る

予定の時間には成っている。だが秒針はまだだ

「あと15秒」

ゾンビたちはだんだんカゲハを追い詰めていく
それでもカゲハは打ち続ける

「あと10秒」

カゲハの肩が壁についた

「9秒」

違うドアからもゾンビたちがあふれてきた
そして囲まれていく…なぜか点けたはずの電源は消えハンドガンか
ら発せられる火花が頼りになる。

「8秒」

距離が縮まっている

見えるものは全て自分に向けられる手、手、手

「7秒」

あと五メートル

もはや円のように囲まれ、逃げ場などない

「6秒」

あと4メートル
たまに小走りでくるゾンビを蹴り飛ばす。だが亡者の群れはそれをまた押し返す。

「5秒」

3メートル

常人なら発狂しているレベルの囲まれ方である。だがカゲハはあきらめない。

「4」

2メートルまで来た

ホームにまだまだなだれ込込む亡者たち

「3」

手が伸びてくる

もう捕まる。

「2」

カゲハは手元の複数ある閃光手榴弾の信管を抜いた

「1」

光が瞬くまに広がっていく

体制を低くしてゾンビたちの間を抜ける

カゲハはフックロープを投げた。

キーーーーー

ガタンガタン、ガタンガタン

ガタンガタン、ガタンガタン

生命など存在しないその闇の中で数週間ぶりの光が通り過ぎていく。線路を揺らし、トンネルの中を音で反響させながらその列車は走っていく

カンカンカン

梯子を降りていくと貨物の間には軍用の車両がある、カゲハはコンピュータにハックした時に選択した車両だった。

カゲハは自分の持つハンドガンを上に向け引き金を引いた。

カチン！
先ほどの戦闘でもはや弾など撃ちつくしたので空の音が響く

中に入り、扉を閉めた

車両の中には武器と弾が豊富に置いてあった

カゲハはショットガンを手取る、弾は十分に入っていた。型はM19でカゲハはそれを腰の後ろに掛ける

次にグレネードランチャーを取る。オプションパーツにマシンガン

がついている、普通なら逆なのだがこのモデルは少し違った。弾を十分に補充し、予備の弾も装備する。

他にはないかと辺りを見回すと、奥の方にノートパソコンが置いてある

パソコンの裏側には大きくアンブレラのマークが印しており、カゲハはそれを起動させまた端末機を差す

すこし時間が経つとパスワードを解除されパソコンのデータを見れるようになった

「！」

データのリストに「monster data」と表示されてる
ファイルを開くと写真付きで説明が載っていた

ハンター

爬虫類をベースとし

B・O・Wとしては優秀なほうであり

ある程度命令が理解できる

緑色の皮膚とその発達した爪が特徴的であり動きはかなり素早い種類が多数ある

リッカー

t-ウイルスの侵食によりその体には新しい筋肉が出来始めている剥き出しの脳が特徴でその爪はかなり巨大化しており聴覚だけで獲物を把握する

カエルのような舌は強力な武器でもある

公式の $B \cdot O \cdot W$ ではないがその危険性からここに表示させる

カゲハは一体ずつ見ながら過去を思い出していた

カゲハは昔、アンブレラヨーロッパ支部の社員であり研究部門のほうにいた事もあった

t-ウィルスの実験にも少し関わり

凄惨な現場も何度も経験した

カゲハには兄がいた

兄は一種の天才と言われる者だった

兄の口癖は

「私より天才は沢山いる、ただやれることはできるだけやってみせるさ」と言って研究主任にも務めたこともあり

人々には「あのウィリアムに並ぶんじゃないのか？」とも噂されたこともある

だが、その天才は一つだけミスをした

新しいウィルスの開発に着手し、ついに完成させたまではよかったが彼にとつて開発したウィルスは脳に負担をかけずに肉体を活性化させ超人的な動きをするはずだった

天才の計算は一つの小さなミスを犯しその小さなミスから大変な答えを導き出した

数学の計算においても一つ間違えればすべてが狂う・・・これも同じだった

結果、本人が感染

研究室内でバイオハザードが起きる
直ちに武装部隊が突入しなんとか制圧された。

だがその制圧した武装部隊の中にはカゲ八がいた

これは社内で極秘にされ、もう一つのウイルスサンプルは回収された
違う支部に移されて研究対象にされている。

カゲ八はこの機に社のことの黙秘を条件にアンブレラを辞めた

そのあと兄の家を訪ねた

膨大な研究資料の山が重なっているその机、その引き出しを開けると「カゲ八へ」と記す紙があった。開けるとそこには一通の文章があった。

それにはこう記してある

「この文を読むのがカゲ八だとしたらそれは私が社に捨てられ殺されるか自害をしている頃だろう。カゲ八じゃないなら読んでも意味はないだろう。ここに書いてあるのは研究内容など何も関係ないことなのだから。」

私はこの会社に務めて尽くしてきた気づいてしまった、私は 悪魔
なんだと言うことを人々に破滅をもたらす元凶ということに感じ
てしまった。

私は天才ではない、ただの人間なんだ
そう、アンブレラは気付くだろう自分達がした愚かさを

この手紙を読んでいるのがカゲ八ということ願う

カゲ八、君だけは人道を踏み外さないでくれ君は私以上に天才だ、いやカゲ八は私よりも全て勝っているはずなんだ

自分から目立たとうとしない君をいつも疑問に思っていた、私は今理解した

私は自分を見失ってしまったのだ

そしてもう引き返せない

カゲ八、君だけは自分を信じろ

君は賢い、必ず世に光を当ててくれ」

兄の葬儀が終わったあとラクーンは消滅した

そのあとアンブレラ社の株は大暴落し事実上倒産する形になる

しかし、アンブレラは残っていた

同じアメリカでアンブレラがなくてはならない存在となってしまう街が

ラクーンよりも数倍の人口で、そのDearシティーは決して目立たないようにその街にはアンブレラが深く根付いてしまったのだ

そして今、このDEARシティーでバイオハザードが起こり

カゲ八は今その街にいる

カゲ八は考えた

ここも消滅するだろうか

いや残るだろう

街の人間は衛星から見張られ

連絡をしようともあのヘリの時ように妨害される

そういう街なのだ

そう、この街はある男に実験場にされたのだから

カゲ八はそのことをパソコンの映像を見ながら思い出していた

するとふと、一番下の方に 最重要機密 と表示されている所を見つけた

それにはプロテクトがかけてあり少々時間がかかるようだ
ハッキング端末に解除を任せ時間を見る

「あと10分か…」

解除にはまだ時間がかかりそうだ

ガン

「!?!」

何かが屋根の上に乗ったような音がした

カゲ八は銃に手をかけ

ハシゴに登る

パソコンの方を見ると解析は終わったようだ

だがカゲ八はそれを見ずに登っていった

両腕が体の数倍の長さで太さで、人と思えない新しい筋肉が出来上がっていた

指に見えるあれは人間の腕ほどある

そしてその指の先に付いている爪は30センチはあるだろうか

だが、かろうじて人間の頭が見えるがその巨大な体に埋め込まれているようにも見えた。

カゲハは銃を構える

「ウウウオオオオオオ!!!」

怪物は身がねじ切れそうな放吼を上げる

ガタガタと足下が揺れ

迂闊に動けないことを警告する

位置的には怪物が運転車両の方にいるため、車両を切り離すわけには行かない

「やるしかないのか」

右手のTSW1013 (Smith & Wesson) と左手のM1911A1 (Omega) を連射する

「・・・」

よろけもせず、その怪物に弾丸が肉に食い込んだだけでさして効いているようには見えない

怪物が近づいてきた。ゆっくりした動きだが、けっして油断はでき

なかった。

カゲハは撃ち続ける。腕、肩、頭、腹、そして巨大な目玉、どす黒い液体を吐き出すだけでめり込む弾丸をまったく意に介していないようだ。

カゲハの目の前まで来ると怪物は腕を振り上げる。しかし、カゲハはすばやく脇をすり抜け回避する。振り上げた腕は空を切り、怪物はすぐさまカゲハの方を向いた。

ガチャン

弾が装填される音と共に、そこに待っていたのは散弾の嵐であった。

一発撃ち、怪物は怯む

その隙をカゲハは逃さなかった

二発目三発目と撃ち

怪物の距離を離していく

「グオオオオ!!!」怪物は腕を広げ怒号を上げる

カゲハはいつきに距離をとった。その広げた腕が仇となる、がら空きのボディにグレネードランチャーが撃ち込まれる

「グオオオオ!!!」

怪物は吹っ飛び、電車から転げ落ちる

だが、怪物は屋根のへりを掴みまた上がるうとした。

「しつこいやつだ……」

カゲハはそこにグレネードランチャーを撃ち込む

「アアアアア…」

怪物は燃え上がり消えていった。

スピードを上げながら地下を突き進む電車の上にたたずむカゲハ

カゲハはフウツとため息をつき、武器庫車両に戻る

先ほどのロック解除がされているかパソコンを見た。

「?」

パソコンの電源が消えている

もう一度起動するとパソコン内のデータが全て消えていた

「チッ！」

何者かがパソコンに侵入し、全て削除したのだ

幸い接続した端末機はなにもされていなかったが、モンスターデータなどは閲覧不可能となっていた。

電車の速度がだんだん落ちてくる。

どうやら、当初の目的地 evolutionary school に近づいてきたらしい

カゲハはショットガンとグレネードランチャーを装備して外へ出た。

屋根に登り、風に当たりながら先程戦った怪物のことを考えていた

「あれは何だったんだろうか」

ふとカゲハは思い出す

あの巨大な目、ハンドガンをもろともしない強靱な体、ふとアンブレラにいた頃が頭に横切った。

(ウイリアム・バーキンが新型のGーウィルスを作成させたと聞いたことがある、もしかしたらあれなのかもしれない)

そんなカゲハの乗る電車はだんだんと速度を落とし、駅に入っていた

ウイーン

ガタン

プシュー

駅のホームは天井の薄暗い明かりに照らされている

カゲハは銃を構えながら電車を降りた。

ゾンビがいないことを確認して階段のほうを目指そうと歩きだそうとしたその瞬間

ペタッペタッ

奇怪な足音がする

ペタッ

ペタッペタッ

その音のほうを向くと、異形の影が駅のホームの壁をはいずり回っていた。

そう、T・ウィルスの変異体【リッカー】である。

何かが待ち構えていることは予想はしていたが、一つ予想してなかったことが起きた。

リッカーは一体ではなく多数いるのだ

2体は天井に張り付き

1体は地面を這い

もう2体は横壁に張り付いている

(五体か…これはまずいな)

ハンドガンを手に取り、息を殺す。

できるだけ静かに前に進んだ。いくら耳が退化したといえどその研ぎ澄まされた感覚で気づかれているのだ。

計5体の変異体を相手取る覚悟を決め、カゲハが銃を構えた瞬間

バキン

ベキベキベキ！

急に後ろの車両が崩れた。

（なんだ…？）

すかさずリッカー達が音に反応してその方向へ全力疾走する。

ガコ

ベキ

グチャ

バキ

奇怪な音を立てながら、リッカー達は何者かの圧倒的な力によって潰され、切断され、握り潰されてしまった。

薄暗い明かりの中に巨大な目が3つ

血が車両と通路に飛び散っている。

その巨大な目は、肩と胸と足に付いていた。そして、全ての目はカゲ八を凝視している

カゲ八はその全部の眼に目があった。

その瞬間、カゲ八は何か全身に悪寒が走る。自分の中の全細胞が逃

げると言ってる気がした

「グウアア・・・ウオオ・・・」

怪物はいささか苦しんでいるように見える

怪物は全身黒焦げで、所々肉がえぐれていた。

特徴からは、先ほど戦った怪物なのだろうか
その醜い姿はもはや人間とは言い難い

バキン

バキン

怪物の体から骨が變形していくような音がする
(なんだ...)
だが3つの目は依然としてカゲハを見てる。

音が止み、一瞬間が空いたその瞬間

「！」

「グウオオオ！！！」

G - ウイルス特有の骨格変化、変異が始まり、たった今終えたのだ。
Gの怪物は雄叫びを上げ、巨大化していく

そう

人間の体はもうそこにはなく別の生物になっていた

とうに体長はを2メートルほど大きく

背中から腕が2本

「メキメキ」と効果音つきで這い出してきた

さらにどこからその遺伝子情報を手に入れたのか尻尾まで生えてきてる

多分、体を支える為なんだろうか

大きな翼のような腕は先程のようによけられる気がしない

「化け物め……」

カゲハはグレネードランチャーを構えた。威圧感を全身で感じ、Gの怪物を睨む

Gの怪物はゆっくりと近づいてくる。

背中から生えた巨大な腕を前につき、後ろ足はその体を支えられるように巨大な鉤爪がそのアスファルトの地面を掴んでいる

「……」

カゲハはマシンガンの引き金を引いた。ガガガガと音を立てマシンガンは躍動する、多量の弾丸が肉に突き刺さった。

が、先ほどのように表面の肉がえぐれるだけで痛みなどまるで感じてないようだ

Gはだんだんと速度を上げて直進する

ダンッ！

そんなカゲハはGへ突っ込んでいく

この化け物には今逃げてもまた必ず対峙することはわかっていた

カゲハにとって執拗に追われることのほうが数倍厄介なのだ

Gはカゲハを背中から生える巨大な手を振り上げカゲハを掴もうとした。

だがその手は強い衝撃で弾かれる。ショットガンによる散弾が手のひらを直撃した。

カゲハは即座にショットガンを腰に固定し、背中に刺さっているグレネードランチャーに切り替える。

怪物の懐に入った

カゲハはグレネードランチャーを構え、超至近距離で怪物の頭へ狙いを定めて股の間をスライディングする
そして、ギリギリのタイミングで引き金を引いた

すさまじい音と共に燃え上がる黒煙

クリーンヒットしたことはカゲハの目でしっかり確認できた。

カゲハは股の間を抜けて立ち上がり

燃え上がるGの怪物のほうを振り向いた。

モクモクと黒煙が上がっているとところをみるとどうやら頭を仕留めたようだ

「？」

だがGの怪物はグレネードランチャーを食らった体制から微動だにしていなかった。

(なぜ倒れない?)

まさかと思い再びグレネードランチャーを構える。
黒煙を上げていたGの怪物はこつちを振り向いた。

「クッ」

黒煙を上げているのは背中から生えた腕だったのだ
防いだほうの手はぐちゃぐちゃになっていたが他は無傷。

(防がれた)

「ウオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!」

咆哮と同時に腕を広げ、憤怒を表す

胸の眼はギョロギョロと回りを見回し最後にカゲ八を見た

パキッ

パキッ

背中から生えた腕がすごいスピードで再生していく
それと同時にGの肌の表面が鋼のように硬質化していた。

カチッ

カゲハはグレネードランチャーを撃った

弾は勢い良く飛んでいき、G生物の肩に当たる

当たったところは黒煙を上げ、ジャストヒットした……はずだった

しかしGは何事もなかったようにこっちを見ている

弾が当たったところは煙が上がっているものの、たいしたダメージにはなっていないようだ

(これはまずい……！)

ダンッ！

床を撒き散らし、Gが飛び上がる

この駅の天井は約十メートル
それを容易に飛び越える勢いだった

ガッ！

G生物は天井に掴まった。
そしてカゲ八を向き、跳躍体制に入った。

(まずい…!)

バンツ!!

G生物はすごい勢いでこっちに飛んできた

カゲ八はダツシユする

カゲ八の頭上からは獲物を狙う叫び声、そして肌にヒシヒシと感じる殺気が体全体に伝わってきた

轟音と共にG生物は床に着陸し、その勢いで床がめくれ上がる
コンクリートがめくれ上がり、大きなクレーターがその場で起き上がる。

(危なかった…それ以上にこの戦闘力は異常すぎる……どうすれば)
カゲ八は間一髪よけてたがあれに当たっていたと思うとさすがに恐怖を覚えずにはいられなかった

「まずいな…」

カゲ八は電車のほうへ走る、それはG生物がカゲ八へ突進を開始したからである
ちょうどG生物はカゲ八より駅の出口のほうに着地していて車両のほうへ追い立てられるかたちになった

「ガアアアアア!!!」

背中から生えた腕を使い、床を蹴散らしながら追ってくる

(まずい…追いつかれる！)

カゲハは手榴弾を無造作に取り出し、4ついつきに栓を抜き床に転がした

しばらくして背中にすごい衝撃が走る

カゲハは爆風で飛ばされ武器車両の前に投げ出された

「！」

すぐさま起き上がりG生物を見る

G生物はひっくり返り、また起き上がろうとしてる

その隙にカゲハは黙って武器車両に入っていた

なにか使えるものはないかと辺りを見回す、いつG生物は起き出してこっちにやってくるかはわからなかったのであまり時間はない。

「！」

(なんで気付かなかったんだろう)

そこには三点連結式のロケットランチャーがあった。

砲塔、スコープ、さらに連弾発射用の大型マガジン

カゲハはすぐさま組み立て外に出る。

G生物は車両から出たカゲハを見るとすごい勢いで突進を開始した

「ゲウオオオ！！！！！！」

「死んでくれ化け物・・・」

引き金を引き、G生物にロケット弾が飛んで行く
G生物は背中から生えた腕で防ごうとした。だが、さっきと比べものにならない衝撃がG生物を襲う

「やったか？」

煙を上げているG生物を見る
ボタボタと血が滴り、G生物は苦悶の表情を浮かべた

するとミチミチと腕の間接部分が崩れだし、腕から血を噴出しながら背中から生えた腕が床に落ちた

「まだか…ロケット弾を食らって生きてるとは」

カゲハはもう一度弾をセットした。
G生物はゆっくり近づいてくる。

「さあ、死ぬんだ・・・」

カゲハはそうつぶやいてロケットランチャーを肩に背負い、標準スコープへ目をあて引き金を引いた

もう一度ロケット弾が飛んで行く

ダンッ

Gは飛び上がった

「!?!」

飛んでいったロケット弾は奥の壁に当たってしまった

「まずい・・・あと一発」

あと一発しかないのはさすがにつらかった

先ほどG生物に撃ち込んだロケット弾はG生物を倒しきれなかった
ということは下手に違う所に撃ち込んでしまうと勝ち目がなくなっ
てしまうことを意味していた

しかも2発目はよけられるという失態まで犯した、これはG生物が
ロケット弾を警戒しているということにもとらえられる。

「このままでは…まずいな」

ブンッ

カゲハはロケットランチャーを投げた。

ガラガラと音を立ててロケットランチャーは車両のほうに転がって
いった。

ダンッ！

それと同時にGの怪物は天井からカゲハめがけて飛ぶ、それはカゲハが床を蹴ったのと同様。

めくれ上がる床そして起き上がるGの怪物。カゲハはそのときすぐさま起き上がりGの怪物の後ろに回っていた。

カゲハはマシンガンの引き金を引いた。効いていないようだったが誘導には充分だった。

Gの怪物はカゲハめがけて突進する。振り上げた爪がカゲハを狙っている。

しかしカゲハはそれをよける。そしてまたスライディングで怪物の後ろへ。

だが先ほどとは違った。Gの怪物の懐に手榴弾が置いてある、それはすぐさま爆発し破片がGの怪物の目玉に突き刺さる。

「ウガアアアアアア！！！！！」

咆哮を上げながらひるむGの怪物、カゲハはすぐさま投げ出した口ケットランチャーのところに行きスコープで怪物への標準を定める。

「さあ…終わりにしよう」

カゲハがそうつつぶやき引き金を引こうとした瞬間。

ダンッ！

再び怪物は飛び天井に張り付く、怪物自身その身が危険にさらされていることを察したのだらう。

「チッ！」

天井に張り付く怪物に再び標準を定めるがそこからだと狙いが定めにくかった。

だが、カゲ八はあることに気づく。武器をマシンガンに持ち替え連射した、一つ腕がなくなっているのもう片方の腕を狙う。

バランスを崩すGの怪物、カゲ八は引き金を引き続ける。

するとついにG生物はバランスを失っていきカゲ八を飛び越え武器車両に逆さまに落っこちた

「そついう運命だ」

武器車両のほうへロケットランチャーを向けた

これがラストの弾だった

「哀れなGーウイルスに犯されたものよ、安らかに眠ってくれ」

カゲ八は引き金を引く

ロケット弾は勢いよく飛んで行き、武器車両に着弾した。そして数々の弾薬に誘発して巨大な爆発が起こる

その爆風の大きさと燃え上がり方を見ると、さすがにG生物は木っ端微塵になっているだろう。

カゲ八は炎の中で苦しみの声と影が見えた

「……」

無言でカゲハは出口に歩き出す

そしてカゲハは地下の死闘から生還を果たしたのだった。

任務「3」 搜索、そして再会

カゲハはホームの階段を上っていく。

改札口に出ると女が立っていた

カゲハは一瞬身構えたが綺麗な格好からはゾンビではないようだった。

「誰だ？」

「日本から研修に来たカオリ・フジイよ、他のへりに乗り込んでたの見てなかった？」

女は黒髪で長い髪を後ろに束ねている

「よく生きてたな」

「女だから？なめないで」

「そつか・・・他は？」

カオリは首を横に振る

「よくここまで来れたな」

「わからない、ただ必死に走ってきたから」

うつむいて悲しそうな顔をするカオリ。

だがカゲ八からは少し芝居じみてるように感じた。

「仲間を見捨ててか？」

カオリに少し動揺が走る。

「え？いや違うの、他の仲間は別行動よ」

「じゃあなぜここにいる？もしかしたらお前一人で逃げる気だったんじゃないのか？」

「違うわよ…大きな音がしたから行ってみるとあなたがいたのよ」

「じゃあなぜ助けなかった？」

「無理よ！あんな怪物、戦うほうがおかしいわ！」

「…フンまあいい、俺は行く」

カゲ八は歩き出す

「待ってよ！どこいくの？」

カオリが前に出る

「関係ない」

「あなたもこの研修で日本から来たんでしょ！髪が黒いし瞳も茶色じゃない」

「国籍はフランスだ一緒にするな」

「一緒に行動しない？」

「なぜだ」

「だって心強いでしょ、さっきの怪物だって倒してたじゃない」

「なら何故他の仲間と行動しないんだ？」

「それは…」

カオリの表情に戸惑いが見れる。

「他に目的があるんじゃないのか？」

「…」

カオリはカゲハから目をそらしボソツと言った

「…兄がいるの」

「？」

「この学校の研究部に勤めていてアンブレラの社員でもあるの」

「生きてると思うか？」

「生きてるわ、だってさっき連絡来たもの」

「確かなのか？」

「『私は地下の第三研究室にいる、カオリ助けてくれ』って言った」

明らかに怪しい言い分である。

だがアンブレラの職員だとしたらカゲハにとって有利になることは確かなことだった。

「…わかった俺もそいつに聞きたいことがある」

「あなた…名前は？」

「…カゲハ」

「え？」

「カゲハ・A・ジユタイムだ」

カゲハとカオリは電車の改札を抜け、《職員用エレベーター》と表示されたエレベーターのスイッチを押す

ウイイイン

エレベーターが下からやってくる

ガタン

中は広く、車一台ぐらいは入る。
なにかを運ぶ為だろうか

ピー

「アクセスコード、マタハ音声ヲ入力シテクダサイ」

「リョウ・フジイの妹、カオリ・フジイよ」

ピーピー

「アクセスコード、マタハ音声ヲ入力シテクダサイ」

「そんな…」

「WA0077EUR0796Gカゲハ・A・ジユタイムだ」

「ピーコーン確認シマシタ」

「ヨウコソカゲハ・A・ジユタイム、アンブレラDear支部へ」

ウィーン、ガシャン

扉が閉まる

「今回八、ゲストトシテ招待イタシマス」

「あなたアンブレラの社員なの？」

「…」

エレベーターはどんどん下に下っていく

チーン

プシュー

カゲハとカオリは銃を構えながら進む

バチッ

バチッ

廊下の天井の電気が点いたり消えたりしている

いつから点いていたのだろうか？

奥に進むと《第一研究室》と書かれたプレートがぶら下がっている

カゲハはドアノブに手を掛けた

「そこじゃないわよ」

カオリが言った

「お前が用がないだけだ」

カゲハがピシヤリと言う。

カオリは少しムツとなったがカゲハは心強い味方だ。ここで喧嘩しても意味はない、従うほかなかった。

「べ、無理に別に止めないけど…」

カオリはぶつぶつ言ったカゲハは無視する。だが、少し戸惑いを見せているカオリ。

「お前は先に行つてていいんだぞ」

カゲハは振り向いて言った

「それは私の勝手ですから」

冷たく、冷ややかにカオリは言う。

カゲハはカオリを見据えるが、兄を助けるという使命感からか決心

は揺らいでいないようだ。

「…止めはしないがこの中はゾンビとは大違いだがいいか？」

「いまさらためらわないわよ」

ガチャ

「!?!」

カオリは言葉を失った

沢山の培養層、それに入った異形の怪物
いろいろな機械が並び、資料と思われる紙はどっさり机に乗せられて
いる。

「コードt・06xタイラント」

タイラント と名付けられた培養層の中には2メートルを越す大男
が浮かべられている
その太く長い爪が特徴的で、それに見合うような強靱な肉体がそこ
にはあった

「タイラント計画：そんなのがあったな、にしてもこのタイラントはなかなか安定してるじゃないか」

初期に開発されたタイラントの問題点の心臓の露出はしっかりカバーされて、その外観を除けば全く人と変わらない

「コードS-03ヒュプノス」

ヒュプノスはアンブレラが極秘に開発したタイラントであってタイラントではないものである

確かにタイラントと比べて安定した体ではあるが皮膚面ではまだ未解決らしい

確か試作品が免疫力の抑制があまり制御出来ていなかったため試作品はコードスリープ中だったけな

「なんなのこれは…」
カオリは聞いた

「B・O・W」

「なんなの？それ」

「Bio Organic Weapon、よつは生物兵器だ」

「アンブレラはそんなものを…」

「ここだけじゃない世界各国の支部もそうだ」

「じゃあ兄もこんな研究に…」

「そついうことだ」

「でも何故そんなことを教えるの？あなたは元アンブレラじゃなかったの？」

「今は違うただの軍人さ、それにもうアンブレラに未来はない」

「どついうこと？」

「ラクーンシティがバイオハザードを起こし、消滅したよ」

「？・・・どついうこと？」

「ラクーンシティにミサイルが撃ち込まれたのさ」

「そんな…」

「まだ公表されていないがそろそろメディアが騒ぎ始める頃さ」

「ここもミサイルが来るの？」

カオリは不安な顔をする

「それはない、この街はラクーンシティーほど有名ではないからな」

「ここでもバイオハザードが起こってるわ」

「この街は外部に情報が漏れにくいからな」

「…」

カオリは黙りこくってしまった

「なに、落ち込むことはない」

「私はこれからどうすればいいの？アンブレラは潰れたんでしょ！」

「お前にしかできないことがあるはずさ、未来を見ていると目の前の現実を見失う、兄を助けるんだろ」

「…そうね」

「次の部屋に行くぞ」

ボタン

2人は廊下に出て扉を閉める

この時2人は気づいていなかった

培養液に浸かっている怪物の睡眠薬が切れかかっているという警告ランプが点滅していたことを…
これから事態は悪化していく

だがカゲハは疑問に思っていた。

この第一研究室自体は荒れていたのだが、ゾンビがいない。死体もなく、血痕すらなかった。まるでなにもなかったように

第一研究室を出てからくまなく搜索したが他の部屋は誰一人おらず、このフロアには人すらいないうだった。

「何かあるな」

カゲハは独り言のように言った

「え、何が？」

カオリは一瞬驚いて聞く

「本当に兄から連絡が来たのか？」

「ええ、私たちは対になる通信機を持っているの、これがそうよ」
カオリはポケットから黒い通信機を取り出す

「それはアンブレラの社内用通信機だ」

カゲハは通信機の裏側にアンブレラのマークを見た

「兄に渡されたの、もし、私に会いに来て近くにいると思ったら電源を入れるすぐに居場所を伝える」なんていいながら去っていったわ」

「それはいつの話だ？」

「そうねちょうど二年前のことだったわ」

「そうか……」

「なんで聞いたの？」

「…特に理由はない」

「そう……」

2人は歩きだす

「じゃあこっちが質問していい？」

「答えられる範囲でな」

「なんなの これ は、あの…ホラー映画みたいな…ゾンビ？」

カゲハは笑いながら言った

「まさにその通りだ」

「でもなんで歩いているの？死者じゃない」

「t・ウイルスと言うウイルスさ」

「そんなの誰が作ったの？」

「今お前が立っているところだよ」

「じゃあ兄は？」

「まあ…そういうことだ」

「…」

カオリは黙りこくってしまった

「せっかくだから兄に会ったら説教でもするんだな」

カゲハはフツと笑って歩きだす
人がいない部屋を何度も通り抜けてついに下に行く階段まで来てしまった

「下に行くの？」

「もちろんだ」

階段は暗くて何も見えない
下の階だけ電源がおちてるようだ

「ライトを点ける」

「え？」

「聞こえなかったのか？ライトを点ける」

「いや…あの…」

「まさかお前…」

「…うん」

カゲハは辺りを見回す

それといったものはない

今度は部屋のほうへ行き机の引き出しを開けたが役に立ちそうなものはない

「これでいいかな」

カオリは違う机の引き出しから出したのは小さなペンライトだった

「気休めにはなるだろう」

「あまり自信ない言い方ね」

(そりゃあそうだ…)

カゲハは心の中で思った

暗闇の中へ慎重に階段を降りていく

カゲハはセント・カルネ駅のことを思い出していた

だが今回はさらなる闇の中へ突き進んでいく

下の階まで着くと2人は銃を取り出した。

サーチライトを取り出して辺りを照らす

右の通路に3体、左の通路に5体、まっすぐ行った所には白衣を着た亡者でいっぱいになっていた

「別れて行動するぞ」

カゲハは言った

「いやです」

カオリは断固拒否という顔をした。ただでさえ不安なのに単独で行動という選択はカオリからしたらしたくなくかった。

「真ん中から行くのは無理だ、左右から行けば先の扉に着く」

「無理よあんな所行けるわけないじゃない」

「俺にもう1人守る余裕はない。俺は単独のほうが得意だ」

「でも…」

しょうがない、と顔をしたカゲハはショットガンとサーチライトをカオリに渡した

「これを使えば一気に奴らが来た時一掃できる」

「ペンライトで大丈夫なの？」

「なんとかかな」

カゲハは二丁の銃の一つにペンライトをくくりつける

「よし、行くぞ」

2人は二手に別れて動きだした

カゲハは左に

カオリは右に

カオリは右の亡者3体をショットガンで倒して先に進んだ

「なんでこんなことになっちゃったんだろう」

カオリはこれまでのことを思い出していた

その能力と実績を買われこの講習会に参加した
基本的に医療、薬品系が長けていて

療養所だって一人でひらけるぐらいだった

だがカオリはそういう物だけでは人を救えるものとは思っていないか

った

ついに自衛隊に入隊してさまざまな訓練を得て今の姿がある
しかし二年前に兄、リヨウが海外へ転勤した

カオリのさまざまな知識はリヨウから教えてもらっていた

リヨウは昔からの努力家でありアンブレラに入社する前には部屋が
資料で埋もれていた

まだその時は高校生だったカオリはそれにちよくちよく目を通し知
識を着けていった

リヨウが家で難題に苦しんでいた時にはカオリはその問題を頭で解
いていた

だがそのことはカオリは口にすることはなかった
そう、カオリは天才の分類に属していたのだ。

昔からリヨウはカオリに追い越されがちだった。だがそれはリヨウ
の原動力となり、一流大学へ行かせ

世界的薬品会社アンブレラへに入社させることになる

カオリは思った

(なんで…なんでこんなことを…兄さん…)

「ウオオ…」

暗闇の中でうめき声がする

「？」

サーチライトを照らすとゾンビのような物がいた

「ウウウ…」

いささか苦しんでいるように見える

そこらのゾンビとは違うそれは服は着てない

その活性化した肉体は筋肉繊維剥き出しで、動く肉体標本に見えた

「なんなのよ…」

カオリはショットガンを構え

その腹部に散弾を放つ、手にビリビリと衝撃が走る。

醜い肉塊は二メートルほどぶっ飛び、転がった

「ウオオ…ウオオ！」

しかしそれはまた起き出した

撃ったはずの腹部は肉がえぐれてるだけだった

「お願い…もう起きてこないで」

もう一発撃った

今度は頭がぶっ飛び動かなくなった

「…なんで？なんなのよ…」

「ウオオ…」

「ウアア」

「ウウウウ」

また同じようなゾンビがやってきた

今度は躊躇なく引き金を引く

「なんでこんなものを…兄さん!!」

カオリは自然に涙が出てきた

止まらぬ涙を拭いながらショットガンを何度も撃つ

「お願い…来ないで!あなた達を撃ちたくないの!!」

アンブレラは人を応用する実験

つまり人に感染させた状態からさらに進化させる実験を行った

結果は筋肉組織が発達し 普通 の状態よりは良くなった
耐久力に優れている分やはり命令をこなすには難があった

カオリはそんな哀れな存在に涙が止まらなくなった

『頭がいくら良くても、体いくら動いても、人として生きて行か
なければならぬ』

決して人をやめてはいけないんだ』

昔、カオリの兄リョウ・フジイが言った言葉だった

カゲハは今、アンブレラの研究所にいる

この上の evolutionary school から直通で
行けるこの場所はまさにエリートだけが来れる 聖域 である

本当に来れるのはごく僅かであり、アンブレラ思想に合う 頭が
良い 人間がこの場所に立つことができる

カゲハは 頭が良い 人間であつた
何よりも任務では心を 無 に出来る人間でもある

(なんであの女を連れてきたんだ?)

カゲハの頭の中はその疑問でいっぱいであった

(なぜ?)

どの任務にも 無 に来た自分に異変が起きていることはわかっていた

(まさか同情してるのか?)

自分に人間じみた感情が芽生えていることがカゲハは何よりも驚いていた

「今はあの女の兄の所に辿り着くことが先決だろう?今はそのことだけを考える」

カゲハは銃を2つホルスターから取り出した

白衣を着た男たちは久々の生きた者を見ると肉を貪るべく向かっていく

「邪魔だ」

二丁の銃から放たれた合計五発の弾丸は眉間を撃ち抜く

「さすがにきついな」

ハンドガンにくくりつけられた小さなペンライトは弱々しい光を放っている

照らせてもせいぜい五メートルぐらいだ

カッ

カッ

カッ

何かの足音がする

まるで足の爪を響かせているように

カッ

カッカッ

カッカッカッ

それも一つではない

複数でやってくる

カッ

ライトで照らすとそこには緑色の鱗を纏った爬虫類のような生き物がいた

「!?!」

(ハンターか)

即座に二丁の銃を連射する

ハンターは奥に吹っ飛び暗闇の中に消える

だがカゲハは発砲したその一瞬の光でハンターの数を把握した

(6体か…更につらいな)

カゲハは目を凝らす

「ダンッ」

地面を蹴る音がする

カゲハは銃を構えたが胸のほうに重い感覚が走る
カゲハはその重みで倒れてしまった

「クソッ」

揉み合いになりながらカゲハは銃をハンターの腹部に発砲する
奇妙な金切り声を上げながらハンターはその痛みで即座に退却した

「面倒だな・・・」

カゲハは片方をナイフに変える

ライトを前に向けハンターを照らし、相手の状態を確認する
ハンターの一体が腹部から血を流していた

今度は三体同時に向かってくる

カゲハはハンドガンを数発発砲したが素早いサイドステップで避けられた

ハンターが腕を振り上げ、その鋭い爪を突き立てる

カゲハは身を伏せてかわし、そしてナイフを下から上に切り裂く

ハンターは悲鳴を上げた

カゲハはその隙を見逃さずハンターの頭を撃ち抜く

一匹仕留めたが今度は左右からハンターが腕を振り上げる

暗闇の中で反応が遅れたカゲハは左のハンターの攻撃を食らってしまふ

「！」

爪が肩に食い込む

右のハンターの攻撃は背中に当たったが、防弾チョッキのおかげで防がれた

「!？」

左腕に激痛が走る

左のハンターはその鋭い歯で腕に噛みついていたので

「!？・・・離せ！」

カゲハは右に持っている銃を頭に押し当て引き金を引く
超近距離から放たれた銃弾はハンターの脳に突き刺さり、その持ち主の動きは停止した

しかし、噛む力は弱まったが歯が腕に食い込んで取れない
カゲハは無理矢理引き剥がそうとする

カラン

激痛でナイフが落ちる
歯の部分が筋肉と神経の間に食い込んでいて常人なら悲鳴を上げているぐらいの激痛である

すかさず右にいるハンターはもう一度腕を振り上げる

腕にくつついたハンターをなんとか振りほどもぎ、今度はバックステ
ップでかわし銃を発砲する

肩と足に当たったようだ

ハンターは身が崩れ、そこにカゲハは同じように眉間を撃ち、一度
マガジンを入れ替える

「!?!」

突然左腕には熱いほどの激痛が走る

その痛みでマガジンを落としそうになる

(ワクチンは打ってあるはずなんだが…)

カゲハは前を向く

前の三体がやられたせいか、少し警戒してるようだ

ハンター達は後ずさりして一斉に飛びかかるうとした

カゲハはそのチャンスを見逃さなかった

「よかったよ、これで間合いができた」

ハンターに火薬がたっぷり入った弾丸が向かっていく

ハンターの1体が爆発した

その衝撃で横のハンター達が吹っ飛ぶ

片方は爆風に巻きこまれ

片方は壁に打ちつけられる

壁に打ちつけられたハンターのほうが起き上がることをする

ダンッ

カゲハはハンターを足で押さえつける

ハンターは必死にもがき、押さえつけている足を振りほどこうとする
だが、ハンターの抵抗もむなしく頭上からの銃声でおとなしくなる

そう、永遠に

「ぶっつ」

カゲハは一息つかせて真っ黒な闇をみる

ウウウウ

後ろから呻き声がする

カゲハはナイフをしまい、もう片方のハンドガンを抜いた

「休ませてくれないか…」

激痛が肩から全身へ走る
そして左腕から血がダラダラと流れ出るのを気にせずカゲハは走り
だした

一方、カオリはもう第二研究室の前に着いていた

右の廊下から聞こえる銃声に反応はしていたが助けに行くか行かないか迷っていた
どうせ足手まといになるなら行かないほうが良いと思ったカオリは
ずっと立ち止まっていた
のだ

入るか？そのまま待つか？カオリはそのことも迷っていた

「…」

「入っても大丈夫かな」

カオリはそういってドアノブに手を掛ける

ガッ

カオリの手を何かが掴む
それは前にも見た手であった

「開けるなら慎重に開ける、なにが出てくるか分からないからな」

「カゲハ…」

カオリはカゲハの腕から流れ出る血を見た

「怪我してるじゃない手当てしなくちゃ！」

カオリは腰のポーチから消毒液と包帯を出した

「大丈夫だ血はもう固まっている」

「大丈夫じゃない！そんなに血が出ているってことは血管まで達しているのよ！今だってかなり危険な状態なはずよ……」

「わかってるさ……」

カオリは包帯を巻き終わるとカゲハに言った

「お願い、あまり無茶しないで仲間が死ぬのはもったくさんのの」

「……」

治療が終わったカゲハは無言でドアを開ける

カチャ

部屋は明るく電灯がついている

中はさして広いわけではなく3つPCが置いてあるだけだった

少し進むとガラスが張ってありそこから下をのぞき込めるようになって
っている

見ると中には蛸のような生物がいる

よく見ると中心に巨大な目玉がありそのアメーバのような動きで四
角い部屋を動きまわっている

「なにあれ？」

カオリを無視してカゲハは資料を見る

それにはこう書いてある

【被験体06号にGウイルスを投与、初期段階の変異中にGと人を切り離す実験を行った。

切断中に抵抗され研究員三人が死亡、一人が繁殖の宿主にされ変異した。しかしそれを処分する際天井を突き破り通気用ダクトに逃走今もどこかで生存の可能性あり、駅のほうへ痕跡が残っていたが途中で追跡不能】

(なるほど…あの時はこいつだったのか)

「ねえ聞いてるの？」

「ん？」

「これはなに？」

「これは……」

五秒ぐらい間が空く

「なにためらってるの？」

「いやー応最高機密だからな」

「やめたんでしょ」

「まあそうだが……」

「もう一度聞くけどこれはなに？」

「Gウイルスっていう新型ウイルスさ」

「カゲハが戦っていた大きな怪物もそう？」

「まあそうだな」

「これが…」

カオリはガラスを通して覗き込む
ウネウネと動いているが、ガラスを突き破る力はないらしく同じ動きをひたすら続けていた。

「行こう、ここにいっても意味はない」

「え？いいのこれほつといて」

カオリは蛸のような生物を指差す。

「大丈夫さどうせなにもできない」

2人は奥のドアを開け

ついにリヨウ・フジイのいる第三研究室に通じる階段を発見した

「やあいくぞ」

2人は階段を降りていく

【地下研究所ウイルス保管フロア】
階段を降りる際プレートに書かれていた

（ということは今通ってきたフロアは【兵器型B・O・W保管フロア】と【量産型B・O・W保管フロア】ということか…）

カゲハは包帯を巻いた左腕を見る
やはり激痛は収まらない

（もしかしてTウイルスじゃないのか？いや、唾液から感染したならばもうとつくに発症しているはず…）

カゲハはアンブレラを抜ける時ワクチンを事前に摂取していた

（…まさか、な）

少し空気の温度が下がってきた
ウイルスを保管するには厳重な管理が必要で増殖しないように一定の温度を保っている

【 - 6度】

電光表示された看板に温度が出ている

「…」

カオリはずっと黙りこくっている

いざ兄を助けにきたがこの街の現状の原因だとは思ってもみなかったらう

下りの階段が終わり

長いアスファルトの廊下に出た

横が十メートル弱と広く、壁にはアンブレラのエンブレムと創始者の名前が彫られている

【オズウェル・E・スペンサー】

まさに 国王 とでも言うような大々的に飾られている

カゲハは天井を見る

天井には電灯が光っている

今通ってきたフロアとこのフロアは発電されている所が違って、停電などの不祥事にも対応できるようになっている

カゲハは考えていた

なぜこの研究所はバイオハザードを起こしてしまったのか

(これも あの人の差し金なんだろうか？ラクーンシティも嚴重に配備されてたはずだ…)

2人はドアの前に立つ

プシュー

ドアが開く

それと同時に冷たい風が吹いた。

「寒い…」

カオリが言った

「万が一ウイルスが漏れても空気感染はしない」

「考えてるのね」

「ここはウイルス保管庫だ、いままで開発されてきたウイルスはここにあり」

「そう…」

カオリは辺りを見回してみる

巨大な冷凍庫がたくさん並び、一つ一つ嚴重にロックされてる
再び前を見ると扉が見える

「ここが兄さんがいる研究室…」

「そうだ」

「…」

「どうした、お前が開けていいんだぞ」

「わかったわ」

カオリはドアノブに手を掛ける

ひんやりとするそのドアノブはカオリの怒りに似た感情を冷ますこと
とはできない

ガチャ

部屋には回転イスに座る

髭を生やした黒髪の男がいる

その男はこつちを振り向いた

「カオリか？」

「兄さん……」

感動の再会とって言いのだが、黒髪の男は奥に居る人間に目が行った。

「もう1人いるな、だれだ？」

「……」

カゲハは口を開かない

「黙秘か……まあいい」

「兄さん……なんで！」

「なんのことだ？」

「兄さんの研究はDearシティーの人たちを犠牲にしたのよ！」
カオリは感情を込めて叫ぶ。

「…おお！そのことか、それは大きな勘違いさ私は何もしちゃいない」

「じゃあ、あの怪物たちはなんなのよ！」

「素晴らしいだろ？私が全部修正してやったんだ、みんな不安定な状態だったからな」

リヨウ・フジイは笑いながら言った

カゲハは前に出た

「お前に聞きたいことがある」

「なんだ？」

「【Uーウイルス】はどこだ？」

「！？」

リヨウ・フジイの表情が一変した

カゲハは銃を構えもう一度言った

「もう一度言う、【Uーウイルス】はどこだ？」

「ちよつとカゲハ！」

カオリが間に入る

リヨウ・フジイはハツと気付く

「カゲハ…思い出したぞ！お前、サルバ・A・ジユティムの弟だろ！ああ、わかったぞこれが運命か！」

「？」

「我が妹カオリと裏切り者のカゲハ、おお！なんとという運命なんという偶然」

「兄さんもうやめて」
カオリは叫ぶ

「時は戻せないのだよカオリ」

若干狂気に満ちた顔をリヨウ、その顔をカゲハは見過ごさなかった。

「なにを企んでいる」

「いやいや、別に逃げようとしている訳じゃない」
リヨウは手を上げる

「3度目だ【Uーウイルス】はどこにある」

「おお、それなら説明してやろう。お前が探しているUーウイルスはここにある。そう、私が研究していたものだ」

「違う、俺の兄が開発したものだ」

「そいつが死んで研究は私に引き継がれた、いろんなことがわかったよ君の兄が開発したウイルスの特徴もな」

「渡せ」

「まあまあ落ち着け、話を聞くんだ。このウイルスはな、サルバ・A・ジユタイム本人の細胞を媒介にしている、下手に他人へ感染させるとGみたいに暴走してしまう。しかしサルバ・A・ジユタイムは感染して死んだと聞いたがそれはUーウイルスが未完成だったからだ」

「だがここで私はUーウイルスを完成させた。
ん、そんな怖い顔するなよ別に君で実験するわけじゃないんだ」

ズガン！

リョウが背中を向けている壁に穴があく

「カゲハやめて!!」

「お前に止める権利はない」

カゲハは再度銃を構える

「全く、話を最後まで聞いてくれ」

リョウはやれやれと首を振る

「Uウイルスはネメシスのように寄生体のようなものだ、それがもっと小規模に誘発してる

サルバ・A・ジユティムはそれを一度に吸収してしまい、脳へUウイルスが達した

とても不完全な生物ができてしまったらしいね、もっとも…君が手を下したみたいだが…カゲハ・A・ジユティム」

「…」

カゲハは銃を下げリョウ・フジイを睨んだ

「私への指令はUーウィルスを完成させること、だが私は気になつてしまった

自分が完成させたUの完全体を見たくなつた
長い年月をかけてそれを可能にしたのだ！
見てくれこれが私が捧げてきたものだ」

リヨウはポケットからスイッチらしきものを取り出しそれを押した
床から培養層が出てきた
中には10代ぐらいの少年が入っている

「!?!」

カゲハはそれを見て妙な懐かしさを覚えた

「これは君の兄さんのクローンだ、まだ完全体というわけじゃないがね」

「そ…それは違法行為よ！人道に反してる！」

「ならこの場所自体が違法ということだ、なら君の隣にいる男だつてとても口には出せないことをしてきたはずさ」

カオリはカゲハを見た。

カゲハはまだ銃口をリヨウに向けている。

「まさか…本当なの？カゲハ…」

「そつだ、言ったはずだ俺はアンブレラにいたと。この男と同じ、研究部門にもいた。」

「そんな」

カオリは後ろに下がる

「みんな…何もかも信じられないよ…どうして?」

カオリの頬に涙が滴る

「なにすぐ慣れるさ、カオリさあ泣いてないでおいで、慰めてあげよう」

リョウが手を広げる

「兄…さん」

カオリにはもうそれを疑問に持つような【心】はなかった
ここまで来るのにいくつも仲間を失い
この世のものとは思えない現実を経験したカオリには精神的に限界が来ていた

カオリは歩きだす

トンッ

カオリの目の前に一本の腕が伸びて、カオリが歩くのを遮る

「カゲハ…」

「お前は何のためにここへ来た？」

「に…兄さんを助ける…ため…」

「なぜそんなに泣く必要がある？」

「カゲハにはわかんないよ…この…気持ちは」

「ああ、わからないさ。俺は任務をまっとうするだけ、だが決して間違ったこととは思ってない、俺はそのくらいの信念がある」

「もういやなのよ、人が傷つくのを見るのを…いつそのこと楽になつた方が…」

「現実から目を背けるな、今お前がすべきことを考えろ」

「私は…」

カオリは顔を上げる

「あー、お話し中の所悪いがカゲハ、君は相当厄介な人間らしい」

2人共日本人の血が混じっていた

母が日本人で父がフランス

サルバは父の血を色濃く受け継ぎ

カゲハは母の血を受け継いだ

サルバの目は翡翠で髪は茶色が混じっていた

一方カゲハは黒髪に茶色の目で見た目から日本人そのものだった

八歳の頃、カゲハは病気になった

ベッドに寝たきりのカゲハは常に高熱を出し、外にでることさえ許されなかった。

そのとき、中途半端な看病しかできなかったサルバは元々自分にあったその勉強魂に火をつける

無力な自分にできるだけの知識を

中学受験をして有名校に入り

優秀な成績で卒業、そしてパリ中心部の難関校も受かった

そのときカゲハは地元のほうの学校に入り、そこそこの成績で卒業している

だがある日、サルバはカゲハのテストの答案をみる
良いわけでもなく悪いわけでもない普通の答案用紙だった

だがサルバは気付いた

回答覧に書かれた間違った答えはかなり不自然に間違えている

一つだけ数字がずれていたり

桁を一個増やしたりと

わざと間違えているようにしか見えなかった

他の答案用紙も見ても同様だった

カゲハは目立つことを極端に嫌っていた

そのため人間関係もそこそこ、友達がいなわけではなく、いるわけでもなかった

ある日サルバはそのことが認めることができず、カゲハを問い詰めたことがあった

その時カゲハは言った

「俺は確かに目立つことは嫌いさ、けど自分のやりたいことができ
ないことのほうがもつといやなんだ。

人生は楽しく、さ」

サルバは言った

「勉強しないと稼ぐこともできないし大切な人も守れなくなるんだぞ」

その言葉にカゲハはこう返す

「俺は大切な人間がいないんだ、俺のまわりにいる友達というやつも本当はなんにも思っちゃいない。」

もし、明日兄貴が死んでも涙はでてこない

俺はそんな人間なんだ」

サルバはその言葉に何も答えられなかった

その後サルバはアンブレラに入社、カゲハはフランスの軍隊にいたが、サルバの推薦によって二年後に入社した

それから五年の歳月が経ち今に至る

現在カゲ八を見つめるその目は以前の兄ではなく
ましては少年のような輝く目でもなかった

「さあ、行くんだ。お前の名前は【イプシロン】だ
5つ目の兵器、タイラントでもなくネメシスでもない完全体だ」

「大切な人間か・・・」

カゲ八は銃を構える

その目の前にいる生物兵器がいつか自分を笑って家から送り出して
いた人間と酷似していたとしても

「...その姿、懐かしいな」

カゲ八は言う

「サルバのクローンさ、生産期間を短くするために作りやすくして
みたんだ」

リョウは自慢げに言った

カゲハは銃を構える

イプシロンが手を上に向ける

メキッ

腕から触手みたいな物が突き出してきた

メキメキッ

何本も腕から生えてきている

コードに似たその触手は腕の血管部分から伸びてきている

「Uウイルスの力だ、血液から新しい遺伝子情報を取得し、独自の攻撃方法を生み出す」

「関係ない」

カゲハは引き金を引く

ガンッ

弾は後ろの壁に逸れた

ガンッガンッ

体を狙った弾はその触手に阻まれる

「いいぞ！それでこそイプシロンだ、半端な銃じゃ反応されてしま
うぞ」

「うるさい」

カゲハはリョウウのほうへ銃を向ける

ダンッ

イプシロンはダッシュユでこっちに向かってきた

「!?!」

カゲハはイプシロンに銃を向ける

だが間に合わず懐に入られてしまう

「クッ」

カゲハはナイフを取り出す

下から突き上げたナイフは触手に阻まれ
イブシロンの攻撃を受けてしまう

「クッ！」

腹に触手が突き刺さる

そして複数の触手がカゲハの首に巻きついてくる
カゲハはハンドガンに至近距離から連射するが触手に弾かれる

「クソッ」

首を絞められたカゲハの体が宙に浮いた

そのまま首吊りのような状態になる

(ヤバい、意識が…)

カゲハの意識が遠のいていく

その最中

ズガンッ！！

イプシロンが横に吹っ飛ぶ

触手の呪縛から解かれ

カゲハは床に放り出される

「ハアツハアツ」

カゲハは呼吸を整える

目の前に見えるのはショットガンを持ったカオリだった

「なぜだ…何故邪魔をするカオリ！」

リヨウは怒号を上げた

「当たり前じゃない、目の前で人が死にそうになっているのにほっとけって言うの？」

「お前はこの兄弟の戦いを邪魔したんだぞ」

「…あなたは間違っている」

カオリの眼は以前のような怯えた眼ではなかった

「…フム、どうやらお前はその男に同情しているようだがその男は

生かす価値のない男だぞ」

「だったら兄さんだって…」

「しょうがない…イプシロン、少し痛めつけてやれ」

イプシロンは起き上がりカオリのほうに向かい始めた

ズガン！

カオリの持つショットガンが火を吹く

さすがのイプシロンでも散弾は触手では防げない、だが今度は飛ばず持ちこたえた

140センチぐらいの少年の体に散弾を食らえば普通は跡形もなく消し飛ぶはず

だが相手はB・O・W

体に穴が開こうがなんの躊躇もなく向かってくる

「来ないで！子供に銃を向けたくないのよ」

「無駄だ、言葉が通じる相手だと思っているのか？」

メキッ

今度は背中からも触手が生えてきた

ズガンッ

カオリの撃った散弾はすべて防がれた

イプシロンが触手を伸ばしカオリの体に巻き付かせる
イプシロンはショットガンを掴み、上に放り投げた。

カツンと音を立ててショットガンは床に落ちる

首にも触手が巻きついてくる

振りほどこうとしてもキツく巻きつかれ、ほどけない

それは、先ほどのカゲハがイプシロンに首を巻き付かれたのを巻き戻したようだった

「うつ……」

ドガッ！

カオリの意識が遠退く中、イプシロンが横に吹っ飛ぶ
カゲハの強烈な蹴りがイプシロンの頭部に入ったのだ

イプシロンがカゲハを睨む

腹部から流れる血を片手で抑えながらナイフを持つカゲハがいた

「ハアツハアツ…お前の…相手は俺だ」

イプシロンはダッシュでカゲハのほうに向かった

カゲハもイプシロンほうにダッシュした

触手がカゲハのほうへ向かっていく

カゲハはそれを避け、そのままカゲハはイプシロンに右からの蹴り
を入れた

イプシロンは後ろにのけぞる

体制を立て直す暇もなくカゲハは左からの蹴りを入れる

イプシロンは倒れる

すぐさま起き上がろうとするイプシロンにナイフが一閃する

右の肋骨下あたりから首にかけて深々とナイフを突き上げられたそ
の体は止めどない血しぶきを上げ、イプシロンは床に突っ伏していく

ゴトン

人が床に倒れゆく音は誰でも変わらない

「ハアツ…次はお前だ」

「ほお、その傷で私に立ち向かうか。いくら戦闘員ではない私でも手負いの人間一人ぐらいは勝てるぞ」

「Uーウィルスを…ハアツ…渡せ」

「なるほど、そこまでの信念があるわけだ」

リヨウは白衣のポケットから赤い液体が入ったビンを取り出した

「これがUーウィルスのサンプルだ、君のその信念に敬意を表してプレゼントだ」

「なんの…つもりだ…」

カゲハは腹部を押さえてる。包帯が巻かれた左腕からもドクドクと血が流れ出る

「その傷：ハンターと戦ったみたいだな、5・6体逃げ出した奴らがここらへんをうろついている」

リョウはカゲ八に向かって歩きだした

「来るな…」

カゲ八はナイフを向ける

「その怪我を治療する」

リョウは左のポケットから注射を取り出した

素早い動きでカゲ八の目の前まで行き、首に注射を打ち込んだ

「安心しろ、ただの麻酔だ」

薄れゆく意識の中カゲ八はリョウの笑う顔が見えた

目が覚めるとそこは医務室のようだった
カゲハはベットに横たわっている

「おお、起きたか」

男の声がした

パソコンのキーボードを打っている手が止まる
男がパソコンの画面から目を離しこっちを見る
髭づらで目に隈をつけている顔が見えた。

リヨウ・フジイだ

「？」

手に冷たい感覚が乗っかる

ガチャ

手錠だった。

「悪いが手錠を掛けさせてもらったよ、また銃を向けられるのはゴメンだからね」

腹には包帯が巻かれ、腕の包帯が取り替えられている
血は最初の状態より収まっている

「なぜ助けた」

「私は人殺しではない、今お前を殺したって何の得にもならないからな。あともう一つ」

リヨウは隣のベッドを指差した

「カオリを呼んだ意味がない」

カオリはまだベッドに横たわっている

おそらくイプシロンの戦闘と今までの疲れがたまっていたのだろう

「今回カオリを呼んだのは君のような屈強なボディーガードが必要だった。」

リヨウが言った

「君にUーウィルスのサンプルを渡す代わりに私をここから外へ連れて行ってくれ」

「……それは確かか？」

「ああ、私はここでは死にたくないからな」

「なら先にUーウィルスを渡せ」

「焦ることはない、もうすでにプレゼントしてある」

「（！?）まさか」

カゲハは左腕を見る

先ほどから腕の感覚がない

だがドクドクと脈打ってるのがわかる。

「そう、その通りだ。君はただ一人のUーウィルスの適合者だからな」

「ならお前の完成品はどうするんだ？」

「イプシロンか？あれは今睡眠中だ」

「睡眠中？」

「ダメージが思った以上に深刻だったが、もう少しで回復できる」

「あいつも持っていくのか？」

「どのみちアンブレラは終わりさ、ラクーンシティは消滅した。責任逃れはもうできない。イpsilonだけは持ち帰る」

「…そうか」

「ラクーンシティは…アンブレラが原因で消滅したの？」

カオリはいつのまにか起きていた

「そういうことだ」

「みんな消えちゃったの？」

カオリは焦る気持ちが押さえられない

「そういうことだな」

「そんな…あそこには友達が…ヨー」

カオリは下を向く

「まあ、ここは破棄しないだろう。マイナーな街だからしばらく実験場になるだろう」

「用がなくなったらもついらないじゃ済まされないのよ!」

「ラクーンシティーはそれで済んでしまったんだ」

「自分たちが引き起こしたことなのに!」

カオリは叫ぶ

「仕方ないことだった、わざわざラクーンシティーを故意でバイオハザードを起こすはずがない。あれは明らか事故だ」

リヨウは軽くイライラしながら言った

「このDearシティーも事故だっていうの?」

「そうだ!こんな危険なウイルスを街にばらまくと思っつか?」

「実験場にしたと疑われても仕方ないと思っつわ!」

「少し静かにしてくれないか?」

カゲハは二人を睨む

「今はここから出ることを考える」

「わかったわ」

カオリは体勢を立て直し、一息つく

「そうだな、今はそれが賢明だ」

身を乗り出していたリヨウモイスに座り直す

カオリはカゲハのほうに向いた。少し申し訳なさそうだ。

「あの…カゲハ…」

「シッ！」

カゲハは口に指を当てる

「どうしたの？」

「音がする」

「え？」

カオリは耳を澄ます

ゴン

ゴン

ゴン

ガゴン

「本当ね」

「そんな…ゾンビを含むB・O・Wはここにはたどり着けないはず…」

リヨウはかなり驚いているようだ

「おい、とりあえず手錠を外せ」

「わ、わかった…」

リヨウは慌てて手錠の鍵をポケットから取り出し
カゲハの所に行く

ガチャ

「よし外れた」

「俺の銃は？」

「あっちだ」

リヨウは机のほうを指差す
カゲハは机のほうへ歩いていく

「よし」

カゲハは球数を確認して銃をホルスターに入れる

パラパラ

「!?!」

天井から埃が落ちてきた

「しまった上だ!」

カゲハは叫び

銃の上に構えた

部屋に轟音を響かせ、この部屋にいる三人の鼓動が波打つ

天井が崩れ落ちてく

絶望が、降ってくる……

それは、全てスローモーションで事が起こったように見えた

天井の全体にヒビが入り、ものすごい音を立てながら天井が崩れ落ちてきた。

崩れゆく中にカゲハが見たのは二メートルを越す大男と全身に棘が生えていて人に似ても似つかぬ男がもつれながら落ちてきた

タイラント

ヒュプノス

あの培養層に入っていた2体が戦っていたのだ。
瓦礫が散らばり、それぞれ色んな方向に投げ出された。

「だ、大丈夫か!？」

リョウが起き上がり、それに気づかず叫ぶ。

(まずい)

カゲハは少しでも2体の気を逸らそうと使える手でハンドガンを構える

だが2体は気にはしてないようだ

タイラントはヒュプノスに乗っかる体勢でいる

タイラントはヒュプノスに殴りかかる

タイラントが腕を振り上げた

倒れているヒュプノスへの右フック

そのままタイラントの拳はヒュプノスの顔に直撃する

グシャツと音を立てながら地面にめり込んだ

そして何発も顔を殴り続け、拳が真っ赤に染まる。

ヒュプノスは地面にめり込んだまんま動かなくなった

目の前の敵を排除したと思ったのかタイラントは立ち上がる。
土煙がまだ舞っていてタイラントは周りが見えてないようだ

ふとカゲハはリヨウのほうを見る

立っているタイラントがリヨウの視界に入ったらしい

顔は引きつって、ガタガタと体を支えている腕が震えている。リヨ

ウはまさに《恐怖》そのものを見て感じとっていた。

カゲハ周りを見渡す。

（カオリはどこだ？）

周りを見回すが他に人影らしき物は見当たらない

「!?!」

タイラントがカゲハのほうを見る

カゲハは身を伏せた

あいにく天井が破壊されている為、明かりは少ない
カゲハのほうは暗がり位置したので見つかつてはいなかった

「！」

伏せた体勢からカゲハはカオリを見つけた

カオリの足が崩れたコンクリートに挟まれている

だがカオリはこの状況に気づかず必死に足を取ろうとしてる

(やめろ、今そんな物を退かしたら気づかれる！)

ガタン

足が抜ける

タイラントはカオリのほうを見る。タイラントはカオリを見つけた
ようだった。

ゆっくりカオリのほうへ歩いて行く

(しまった！)

カオリは目の前の大男に気がつく、そして固まった。
カゲハは銃をタイラントのほうへ向ける

だが遅かった

タイラントは腕を振り上げる。

ガッ

カオリに振り上げた腕は当たらなかった。途中で静止している
ふと見るとタイラントの腕に触手が絡みついていた。

ガッ ガッ ガッ

次々とめり込んだ地面から触手が伸びていき、触手はタイラントの
腕と足と頭を掴んだ。

タイラントの体が浮いて反対側の壁に勢い良く飛ばされた。机やパ
ソコンはその勢いで散らばり、奥の壁にぶつかった。

壁にヒビが入り、今にも崩れそうだ

「アアア…」

めり込んだ地面から立ち上がったヒュプノスは背中から触手が生え、
手の爪はハンター以上に発達している
完璧にリミッターは外れ、Gウイルスより不安定な状態に陥ってい
た。

飛んでいったタイラントはすぐ立ち上がりヒュプノスを睨む

このB・O・W同士の凄まじい戦いはこの場にいる人間三人を圧倒した

どちらも資料に乗っている 試作品 ではなく
この研究所で開発された 完成品 である

睨み合う2体で先に動いたのはタイラントだった
タイラントはヒュプノスのほうにダッシュする

ヒュプノスは威嚇する

タイラントの左からのストレートが入る

ヒュプノスのどてっ腹に拳がめり込む

だがヒュプノスは怯まず腕に触手を絡ませる
触手をほどこうとタイラントは触手を掴む

ブシュ

ヒュプノスから鋭い針のようなものが飛び出る

ブシュブシュ

タイラントへ伸びていく針は体に突き刺さっていく
大量の血が流れ出た。

タイラントはたまらずヒュプノスへ強烈な蹴りを入れる

普通の人間なら骨が粉碎骨折どころでは済まされない蹴りはヒュプノスに直撃する

ガツシャーーン!!!!!!

ヒュプノスは研究室の出入り口に吹っ飛ばされていつてしまった。ドアは破られウイルス保存室のほうに飛んでいく。いろんな物が崩れる音が聞こえた。

「アアアア!!!!!!」その保存室のほうから咆哮が聞こえる。それが聞こえたせいなのか、タイラントはそっちへ猛烈な勢いでダッシュした。壊された出入り口を通り再び目の前の敵へ突っ込む

奥のほうから物が壊れたり壁がえぐれるような音が止めどなく反響していき、遠ざかっていった。

「……」

「……」

「……」

カゲハ以外の2人は今起こった出来事をいまいち理解できていなかった

リヨウはまだ震えが止まらないらしく、動けないでいる。

カオリは啞然と天井を見つめ、状況を必死に理解しようと脳をフル回転させてる所だろう。

カゲハは立ち上がり、銃をしまう

「立て、速く脱出の準備をするぞ」

だが2人は動けない

「まったく、この兄妹は……」

フウつとため息をつき

カゲハは左腕を見る

さっきまでは自分の腕ではない感覚だったが今はそうでもない

手をグーパーして、問題ないことを確認する

「カゲハ……君は大丈夫なのか？」

「なにがだ？」

「あんな化け物と戦うつもりなのか？」

「Gウイルスよりましだ」

「戦ったのか？」

「ああ駅でな」

「なるほど、その強さの秘密はそこにあったのか」

「半分は運のような物さ」

「だが生きていることが奇跡に近い、それは君の強さなんだ」

「じゃあ、これも使えるのか？」

カゲハはUウイルスが打ち込まれた腕を見せた

「イプシロンのような攻撃は無理だが必ず君の力になるだろう」

カゲハの兄、サルバ・A・ジユティムはもう自分が思うほど悪魔ではない。人間の本質的にも悪い訳ではなく、アンブレラのなかでも決して「悪」と言うわけではなかった
悲惨な実験をしたとしても、必ず死んだ者へは祈っている「善者」でもあった。そして今、たった一人の弟に希望の光を差し伸べたのだった

死んだはずの兄と、このB・O・Wを頭で重ねる
カオリは立ち上がるイプシロンを見てあることに気付く。

「ねえ、この子すこし大きくなってない？」

カオリに喰らわせられたショットガンの散弾とカゲ八に切り裂かれた傷は見事に消えていた
さらに確かに少し背が伸び、顔つきが大人びてる気がする。

「そうだ、これがイプシロンの特徴の一つで戦闘などで傷ついた傷を睡眠によって回復し、同時に成長ホルモンに似た成分が分泌される」

「一瞬で成長できるってわけね……」

カオリはリヨウの技術に驚いた
だがそれと同時にこの少年が生まれるまでの犠牲はリヨウの机の上に置いてあった資料に大量の×印が物語っていた

「そいつにあいつらが倒せると思うのか？」

カゲ八はこの14歳前後の少年には二メートルの大男を倒せると思えなかった

「カゲ八、君は一つ勘違いをしている」

リヨウはイプシロンに軍用のショック軽減スーツを着せながら言った

「君と戦わせたのはあくまでも実戦データが欲しかった、君と戦ったのは数十分の1に落とすとしたイプシロンだ」

「数十分の一だと？」

「そうだ、イプシロンをなめてもらっちゃ困る、イプシロンが通常の戦闘モードで戦ったら君は原型は残ってないだろう」

リヨウはイプシロンの頭を撫でながら言った

「だが、一つ気になることがある
俺はそのイプシロンを倒した時ナイフを使った。その時イプシロンは反応できたはずだ
銃弾に反応できるそいつがなぜナイフに反応できなかったんだ？」

「カゲハ、君は気付かなかったのか？
君はあの時尋常じゃない動きだった。あの時の君はハンター並みや、それ以上かもしれない」

「弾丸よりは遅いだろ…」

カゲハはあきれかえって言った

リヨウはやれやれと顔で言う

「君はわかってない、人間が走るスピードは確かに弾丸より遅い
進路感応を知っているか？」

人間が走る進路と弾丸の進路は全く異なるものということはわかる
な？

それに反応する脳の捉え方も全く違うものだ

人間が走れば脳は次の行動を予測する、だがそれは普通の人間のイ
メージなんだ。

限界を超えた人間をいくらB・O・Wといえど予測不可能じゃない
のか？

まっすぐ直線に飛んでいく弾丸と上下に進んでいく人間の独特な進
みかたはどっちが予測しにくい？

まあ言うまでもないだろう」

「よく考えているんだな」

「イプシロンの行動は必ず内蔵されたカメラで記録されている」

リヨウはイスに座る

立っていたカゲハはイプシロンに近付く

「一体こいつは何なんだ？純粋な生物ではないようだが」

「まあ…基本構造はネメシスに似ている
だがあれは不安定過ぎるんだ、寄生体なんてものは何をしでかすかわかったものじゃない」

「あれは戦闘に特化したB・O・Wだ、耐久性に優れていて遠隔操作可能のある意味完璧な生物なはずだが？」

「?…君はアンブレラを辞めたと聞いたがやけに詳しいじゃないか」

「実質的にはアンブレラ薬品会社を辞めたことになっているが研究部門のほうには所属していることになっている
つまり社内情報を少しでも流したら法的にも現実でも抹殺できるところとさ」

「それはご苦労だな」

「え…じゃあ私に話してくれたのは？」

「何度も言うようだがアンブレラはもう終わりさ、ラクーンシティの件があるからな」

カゲ八が言った

「あと…ラクーンシティーのことだけだれも生き残ってないの？」

「そうだ、生き残ったとしても一部の人間だけだ」

リヨウが言う

「あそこには友達がいるの！
せめて死亡リストぐらいはないの？」

「ラクーンシティーの住民はほぼすべてTウイルスに感染したと考
えていい、もし生き残ったとしても核にやられているだろう」

「そんな……」

「まあ、そんな落胆するな
脱出できた人間もごく僅かだが確認されている。今は自分達が脱出
しなければならぬからな」

「そうだカオリ、俺は言ったはずだ。自分が今やれることをやれ」

「……わかったわ」

カゲ八とカオリとリヨウの三人とイプシロンは破壊されたドアのほ
うへ向かう

「ひどいな…」

リヨウが言う

並んでいるウイルス保存カプセルは破壊され中身がこぼれ落ちている
全て爪痕や何か強い力で叩き潰されている。

「これ大丈夫なの？中身出ちゃっているけど」

「ここにあるもの全ては正しい動作で取り出さないとウイルスを消滅させられる薬が投与される。このフロアでバイオハザードは起きないようになってる」

リヨウは自慢げに言った

「しかし、あいつらはどうやって起きてきたんだ？」

カゲハが聞く

「多分、長い間放置されたから眠らせる薬が切れたんだろっ」

4人は扉の前に来た

「開けるぞ」

ガチャ

階段へ向かう通路はボロボロで壁に刻まれた文字に深い爪跡が残っている。

立派な銅像も、無残に破壊されていた。

「ああ！、スペンサー郷が！」

リヨウは嘆く

「だれなの？その人」

カオリは不思議そうに聞く

「アンブレラの創始者の一人さ、とても偉大な方だ
今もどこかで必ず生きていらっしやる」

「アンブレラは終わりだったんじゃないのか？」

「あの方は私の才能を気付かせてくれた方だ、それにアンブレラなんて関係ない」

「そうか…まあいい、いつまでそうしてる！行くぞ」

カゲハは勝手にひざまついているリヨウを掴む。

少し名残惜しそうではあったりヨウはしぶしぶ歩き出す。

「もしかして、兄さんが変になったのはこの人のせい!？」

カオリはカゲ八にボソツと耳打ちする。

「…そうかもな」

4人は少し歩いて扉の前まで来た。

カゲ八が階段へ通じるドアを開ける

リヨウは来た道を振り向く

「ついにここともお別れか…ここで作業をしろと言われた時は一生出れないんじゃないかと思ったが…」

リヨウはポケットからスイッチを取り出しそれを押した。

バチッ

バチッバチッ

バチバチバチ

奥の部屋にあるパソコンから火花が散る。他の機材も火花を散らし画面が暗くなっていく。しばらくすると、全データ消去完了 と画面に表示され、画面が真っ暗になった。

カオリは天井を見上げる
そこにはひび割れや爪跡で切り刻まれた階段があった。

「やっと出られるのね…」

「まだだよ、エレベーターまであと2フロアあるんだから」
リヨウも上を見ながら言った。
しばらく部屋から出ていなかったが、研究施設の構造ぐらいはわかっていた。

4人は階段を一段ずつ上がる。
一歩ずつ緊張度は増してくる、もっいつ怪物に襲われても不思議じゃないからだ。

「だが、次のフロアは暗闇だ」

カゲハはハンター達や溢れかえっているゾンビ達のことを思い出していた。
さらに自分が通ってきたことよってまたさらに増えている可能性があったからだ。
リヨウは少し考えるようなそぶりを見せ、なにか思い出したように言った。

「そうだ、階段を上がった所に電源スイッチがある」

「なんでそのことを言わなかったの!？」

カオリはあの人体模型みたいな亡者を思い出しながらそれに身震いしながら言っ

「ああ、忘れていたよ」

「なっ!」

カオリの眉間がよる。

リヨウはそれに少しおびえながらも上を指差した。

「いや…あ、ほらもうすぐスイッチの所だ」

リヨウが指差したところには操作盤みたいな物があった。

カオリがそっちのほうを向くとリヨウは早歩きでそこに向かう

パチン　パチン

リヨウはスイッチをONにしたようだが一向に電源がつかない

「あれ…おかしいな…」

「どうしたんだ？」

「つかないんだよ」

「ちょっと退いてみる」

カゲハは操作盤を見る

日本のブレーカーに似たその操作盤はランプが赤く点滅している

「これはこのフロアだけの物なのか？」

「そうだがなにか？」

「それなら…」

カゲハは端末機を取り出した

「何をする気だ？」

リヨウはカゲハの腕を掴む

「ハッキングするだけだが何か？」

「何か？ じゃない！そんなことしたら逆探知される！」

「……だれにだ？」

「……」

リヨウは口を閉じたままだ

「フッ」

カゲハはリヨウのほうを見る
リヨウはすぐ目を背けた

「……知っているぞ　グランディア將軍　じゃないのか？」

「！？」

リヨウの表情が一変する

「たしか聞いたことある……Dearの英雄でこの街を復興させた人
なはず」

話に入って来れなかったカオリはやっと口を開く。

「本名バース・E・グランディア、この街をコントロールしている
奴だ」

「その人はこの状況で生きているの？」

「そう、グランディアはアンブレラをDearシティーに引き入れた張本人さ。それが今この状況では何を意味するのかは説明するまでもないがな」

カゲハは端末機のコードを操作盤に差し込んだ。

「あ！ちよつと待て！」

リヨウは止めようとしたがカゲハは振り払う

「一つ、教えといてやる。」

俺はここに向かう途中アンブレラのデータを見つけた。だがGに襲われた少しの間にそのデータは何者かに全て消されていたんだ」

「まさか！」

「そう、俺はもう奴らとは顔見知りというわけさ」

「カゲハ、君は奴らに目を付けられているんだぞ……」

「…構わない、俺は任務をこなすだけだ」

カゲハは端末機の液晶画面を見る

画面にはフロアの全体図が映し出されている上に登る階段の所から3方向に伸びた廊下があり、その先には大きな広間がある

そこはGを人から引き離れたタコみたいな生物がいた所だ

カゲハは全体図の電気配線の配置を見れるようにモードを変えた

見ると廊下への電源の接続が切れている、

原因は電気の使いすぎによるショート

だがもう一つの電気の接続が切れている

原因が画面に表示された

「接触障害？」

カゲハはつい呟いてしまった

カゲハはまさかゾンビ達に配線が切れるなんて思わなかった
だが画面上には何か障害物が配線上で妨害している

「電気はつくの？」

カオリが心配そうな顔をした

「半分だけなら…」

カゲハは端末機の画面をタッチしてショートしてた部分を修復させる

ブーン

カチッ

この階の電気が点く音がする

「それでも少し暗いと思う…」

カオリはその不気味な薄暗さに身震いした

「真っ暗よりましだ」

カゲハはハンドガンを取り出す

ガチャ

「…?」

扉を開けるとゾンビが一体もない

「ゾンビ達はどこにいったんだ?」

リョウは辺りを見回す

「だがこんな所まで奴らは来てる」

カゲハは壁に直径五メートルほどのへこみを見つけた

「こんなことをできるのはあのタイラントとヒュプノスぐらいだ……」

リヨウは壁に手を当てながら言う

「先を急ぐぞ」

カゲハは歩きはじめる

「待って！」

カオリはカゲハを呼び止める

「なんだ？」

カゲハはカオリのほうを向いた
その瞬間壁にひびが割れる

ガラガラガラ……！！！！！！！！

廊下の壁が崩れた

破られた壁から出てきたのはタイラントだったが少し様子が違う

「フーツ!!!!フーツ!!!!」

巨大な爪と二メートルはとうに超えた身長

血管が赤く浮き出たその姿は完全にリミッターが外れている

「イプシロン!!!」

リヨウは叫ぶ

それに合わせイプシロンはタイラントに飛びかかる

腕から血管みたいな触手が飛び出す

「ガアア!!!!」

タイラントは腕を振り上げる

イプシロンはそれを避ける

そのまま触手を絡みつかせた。タイラントの体が宙に浮く

イプシロンが放つ触手はタイラントを巻きつけていく

「やるんだイプシロン」

巻かれている触手がきつくなっていく

床に転がるタイラントは体の半分以上が原型をとどめておらず
ただの肉塊にしか見えなかった

「でも、少しかわいそうね」

床に転がるタイラントを見ながら言った

「どうしてだ？」

リヨウは不思議そうな顔をする

「だってこの子、元は人間だったんでしょ？」

「・・・」

リヨウはこの質問をどう答えてもカオリは怒り出すに違いないと口
を開かなかった

「この子・・・ね」

カゲハは転がる肉塊から目を離しカオリを見る

「いつからそんな強くなっただんだ？」

「どっぴいっぴいとっ..」

カオリはカゲ八に視線を移す
カゲ八はフツと笑い、言った

「兄のために仲間を見捨て、暗闇をあれほど怖がっていた小娘がB・
O・Wを「この子」なんて、な」

「別に見捨てたわけじゃ!!」

「最初はそんな突っかかってこなかった」

「!」

「まあ、良い意味でも悪い意味でも変わったんじゃないか？」

「そういう君も変わった」

リヨウが言った

「？」

カゲ八はリヨウのほうへ振り向く

「君は、そんなに人へ干渉する人間だったか？」

「……いや」

カゲハは手持ちのハンドガンを見る

片方は兄、サルバの葬式が終わり自分の道を突き進むことをこの銃に誓った

もう片方はつい最近のこと、セント・カルネ駅のコントローラー
ムで現実が耐えられなかった

一人の人間は自害を選んだ

結果、一人の人間は一匹の亡者になってしまった

その悲劇を目のあたりにしてからその絶望の果てをカゲハは最後まで
で見据えることを誓い

この絶望は自分にとって支えとなるように、最後まで男を守り続け
た銃の意志を引き継ぐことによってカゲハにとってはこの二つの銃
は「誓い」の証なのである

「どうした？」

カゲハはハッと我に戻る

「いや、なんでもない」

(これは任務だ)

カゲハは心を切り替えようとする。

前を向きなおしたカゲハを見たりヨウはふと口から言葉が漏れた

「君は、なんでそんな張り詰めているんだ？」

「(！) . . .それは前にも言われたな . . .」

「だれに？」

「 . . .サメジマだ」

「だれだそれは？」

「もしかして . . .サメジマ先輩？ . . .」

カオリはとてもおどろいた顔で言った

「ああ、同じへりに乗っていた」

「じゃあ . . .」

「 . . .そうさ、奴は死んだ。霧の中、コマザワ隊長とやらを食いちぎってな」

カゲハは無表情で言った

「あなたは、なにも言わなかったの？」

カオリはカゲ八を睨む

とても人の死を言うにはあまりにも軽すぎたのだ。そんなカゲ八は笑うのをこらえながら言った

「なにをだ？」

この言葉はカオリを怒らせるには十分すぎた

「あなたはわかってたはずよ！！このウイルスのこと、そして作用を！」

カゲ八はやれやれと首を振る

「コマザワに忠告はした、だが今のお前のように拒否をしたんだ」

「コマザワ隊長はめったに怒ったりはしない、予想はつくわ。あなたのいった言葉は、忠告ではなく、挑発、じゃないのかしら？」

「・・・フツ、今思えばそうだったかもしれないな」

カゲ八は笑みがこぼれる。

それとは逆にカオリは悲しい顔をして言う

「あなたは・・・冷酷すぎる・・・いやそれ以前に・・・」

「・・・俺に必要なのは任務に必要な力と死を背負える覚悟だ、それ以外は何もいらぬ」

「それは・・・」

「・・・俺は人間らしい感情はいらない・・・」

カオリはカゲ八に背を向ける

「残念だけど・・・あなたとは分かり合えないわ」

「そうか」

カゲ八はさらっと言う

「これでわかったわ」

「俺はわからない」

もう一度カオリはカゲ八のほうへ向く

「あなたとは別行動、私ひとりで脱出する」

「いいんじゃないか？俺は止めはしない」

「ちょっと待て」

リヨウが横から入る

「君はそれで本当にいいのか？」

「いいわよ」

「だめだ、君に死んで欲しくない」

「兄さんは私が死ぬって決め付けるの？」

「いや・・・そういうわけじゃ・・・」

「決まりね」

カオリは歩き出した。

「待て待て待て」

リヨウはカオリを引き止める

「離してよ!」

「だめだ、君に死なれたら困るんだ!」

「そんなの知らない!私は私の道をゆく、兄さんに止められる筋合いは無いわ」

「・・・」

「もういいわね、さよなら……カゲハ、あなたなら他の皆も助けられたはず、それをしなかったということはいずれは……」

最後の言葉を言おうとして、カオリは走って行ってしまった

「・・・」

リヨウは下を向いたまま動かない

「妹に嫌われた兄はつらそうだな」

「・・・そういうことじゃない」

「？」

「カオリはただ一人の肉親なんだ」

「そうだったか？あいつはそんなこと一度も言っていなかったぞ」

「思い出したくもないことだ、カオリにとっても私にとってもな」

リヨウは壁のほうを向いてしゃべり始める

「あの時はまだ私も18の時だった、カオリは15歳で高校に上がったばかりだ。まだこどもだ。」

私の卒業式の日、母が見送った顔はとても苦しそうだ、

父の顔はなんともなかったが、学校へ向かう途中ダンプカーにぶつかり病院へ運ばれた

付き添いに行った母はそのストレスが原因なのかそれともだれも気づけなかった脳内の悪性腫瘍なのか、病院内で倒れ、二人とも同じ手術室でその息を引き取った。

信じられなかったよ、自分が仲間の別れに涙している時に両親は子供に泣いてもらえず逝ってしまったんだ」

「・・・」

カゲハは何も言えなかった、この兄妹はこんな過去を抱えていたなんて思いもしなかったからだ

「母の腫瘍をなぜ気づけなかったのか、なぜ父のほうへダンプカーは行かなければならなかったのか私は大きく悔やんだよ。」

しばらくして私はアンブレラに入社した、けっして両親を蘇らせようとしたわけじゃない。ただ同じようなことは勘弁だった。

入社して間もない頃、研究部にスカウトされた、B・Wを作るなんてできるのか？なんて思っていたがそれで渡されたのはT・ウィルスだ

人を不死へ導く夢のようなウィルスは私を没頭させたよ。グランディア將軍の推薦でこの街へ転勤することになったとき、私はカオリに通信機を渡した。」

リヨウは白い通信機を取り出した

「この通信機はもう一つの電波を傍受すると自動で通信が始まる。

カオリは、君を連れて助けに来てくれた

だが・・・今の私は人格が変わってしまったようだ

日の光も浴びず、この地下で実験に明け暮れていた私は生き残ることしか考えていなかった。カオリを失ったら私は生きていけない

カゲハ、カオリも一緒に連れて帰りたいんだ」

リョウはカゲ八に向きなおして言った

「・・・ああ、かまわない」

カゲ八は銃をホルスターから外す

「いいのか？・・・」

「ああ、あいにくこの任務にはタイムリミットはない」

「さあ、じゃあ行くわー！」

リョウはカオリが走っていったほうに歩きだす

ド
ン

「おっと」

そこには青年が立っていた

このやりとりの最中、イプシロンはずっと同じ所に立っていたのだ

「・・・おまえ、こいつのことを忘れていただろ・・・」

「すまん、イプシロン・・・」

カオリはその頃出口に向かっていた。
いや、正確には出口を探している。

「あら、またこの道に来ちゃった」

薄暗い光の中、カオリは同じ道を歩き続けていた
カオリは先ほどのやり取りを頭の中で何度も再生した

「・・・カゲハも、兄さんもみんな嫌い！」

(俺に人間らしい感情はいらない・・・)

「カゲハ・・・あなたは・・・」

「ウアアア」

「ウオオ」

白衣を着た血まみれの亡者が前方から3体ほどやってくる

「あなたたちも、大嫌い!!」

腰のホルスターから軽量式の自動小銃が取り出される

この街に来てからからは一度も使っていないその銃が火を噴く

ドサ　ドサ　ドサ

カオリは銃をしまう

けっして銃の扱いは得意じゃなかったカオリだったが、そのイラつきが天性の才能を開花させていた

死体を通り過ぎ、大きなドアの前に来た。

そこはいつかカゲ八と待ち合わせた場所だった

カオリは無言のまま扉を開ける

「!？」

部屋はボロボロで、タイラントとヒュプノスの最後の戦闘があった場所らしい

その証拠に部屋の奥に血まみれの白濁色の肌の人間が倒れている

「かわいそうに・・・なんで作られたのも知らずにずっと戦ってい

たのね」

カオリはヒュプノスのほうへ向かう

破られたガラスをくぐり、ヒュプノスへ向かうカオリ。

だが、このときカオリは気づいていなかった。この部屋がどういう部屋なのか

カオリはヒュプノスを見た

その爪はいままで見たことの無いほどの長さで鋭さだった。

口は首のところまで裂け、体全体からは触手が大量に伸びている

だが、腹部には大きな風穴が空いている

勢いよく空いたその風穴はもはや生物兵器にすら回復不可能なほど
広い

しかしその巨体を軽々しく貫いたタイラントは最新のB・O・Wに
粉碎されている

床に転がるヒュプノスはけっして小さくなく先ほど見たタイラント
よりとても大きく、触手だけでなく鋭い棘が数十本と伸びている

「・・・」

カオリは凄惨な現場に目をつむる

ドロッ

ヒュプノスの傷口から黒い液体が飛び出した。血にも見えたが、そのどす黒さはそれに値しなかった。口からも目からもそして腹部の風穴からも

カオリは目を開ける

黒い液体は固形物に変異し、形を成していく

「!?!」

風穴はもう空いていなかった

そこには巨大な眼

”恐怖”そのものがそこに存在した

タッタッタッタッタ・・・

誰もいなくなった研究所内で走る二人。

1人は黒い軍服を着て、もう1人は白衣を着ている。

「いたか？」

銃を構えながらあたりを警戒している。

「いや・・・」

「どこいったんだ!？」

「!・・・チツ・邪魔くさい」

グギャア!!

アアア・・・ ウオオ・・・

カゲハとリヨウとイプシロンはカオリの足取りを追っていたがこんなときにかぎって大量の亡者たちとB・・・Wが起きだしてきた。色んな部屋から次々と出てくるのだ。

「もう上の階に行っただってことは無いのか!？」

カゲハは銃を連射しながら叫ぶ

「カオリは出口とまったく違う方向へ走っていった!！」

リヨウは不慣れなハンドガンを撃ちながら答える。

「そっちにハンター行ったぞ!！」

「やれ!イプシロン!！」

イプシロンは触手を一閃する。

ハンターは真つ二つに引き裂かれた。

「きりが無い・・・」

「だがカオリはこの道を行っただけだ!」

部屋のドアからあふれ出るゾンビ達、そして天井から這い出してくるハンターやリック

B・・・Wによってことごとく足止めを食らう三人。

「おい！後ろからも来たぞ！」

進もうとする反対側のほうからも次々とB・O・Wが現れる。
ハンターにゾンビ改、リッカー改もいる。

「どうなってんだこのフロアは！」

目の前から来るハンターたちをマシンガンで蹴散らしながらカゲハは言った。

カゲハに背を向けハンドガンを連射しているリヨウは叫ぶ。

「このフロアは同階にある量産型の実験場と直結しているんだ！たぶん、冷凍保存していたハンターやその他の実験B・O・Wが全て解放されたんだらう！」

「何体いるんだ！」

カゲハはゾンビが集中しているところにグレネードを打ち込む。ゾンビたちは燃え上がりながら吹っ飛んだ。

「改良したハンターなら50体ぐらい！」

「ふざけるな！」

イプシロンの触手がリッカーの軍団を捕獲し、握りつぶした。
しかしあとからやってくるハンターに触手を切り裂かれる。だが他の触手がハンターの頭を貫く、ハンターは絶命したがまだ次々と新
手は現れた。

「あ、そのハンター！」

カゲハの前に対峙しているネームプレートを付けたハンターを見てリヨウは叫ぶ。

「こいつがなんだ？」

まさか新型のかと疑うカゲハ

「トム！」

「は？」

「そいつトムって名前！餌の時間と自分の姿の自覚を一番早く覚えた奴だよ！」

そのトムがカゲハに飛び掛った。

カゲハは上段蹴りを繰り出しトムを蹴り飛ばす。蹴り飛ばされたトムはハンターの集団に突っ込んだ。他のハンターがその倒れる姿を見て再び前を向くとカゲハが目の前で銃を構えていた。
ダダダン！ ダン！

全てほぼゼロ距離の射撃がハンターたちの脳を貫いた。

「シャアア！！！」

トムがすぐさま起き上がるつとす。だがカゲハはトムの頭を遠慮なく打ちぬいた。

「トム！」

「しるさい！気が散る！」

リヨウはちょっとだけさみしそうだがそれも言ってられない。
また次々とB・O・Wは現れる。

一方

「B・O・W特別観察室」跡地では・・・

「グギヤアアアアアアアアアア！」

「こないで!!」

カオリはハンドガンを連射する

だが”それ”はなにも無かったようにカオリに近づいていく。

カオリは徐々に追い込まれていった

カオリを見るその眼は、カオリのすべてを見透かすような巨大な眼をしていた。

白濁職の肌は漆黒に染め上げられ、もともと大きかった体は二倍以上に変異している

顔と上半身だけならまだ普通の大きさだが、巨大なその腕は龍の翼のごとく巨大化していて手の部分は巨人のごとく肥大化している
下半身は、いや下半身と呼ぶべきものは巨大なナメクジのように丸く膨れ上がり

それを支える脚とは言い切れぬものは腕のように肥大化し、六本も生えた脚たちは虫のような進み方をしている

腹部にある「G」の特徴とも言える眼は、ずっと待っていた

「寄生主」から切り離されたときからさまざまに実験に耐え抜き

延々とガラス張りのところを這いずりまわり、バイオハザードが起ると自分を見る者も気にする者もいなくなった

それでもなお這いずりまわり続け、ついに来た自由の時

彼に思考能力がないにしろその欲望はとどまらないだろう

いま、目の前には「獲物」がいる

「グアアアアアアアアアアアアアアア」

カチツカチツ

「なんなのよ・・・」

全弾を撃ちつくし、なす術がなくなるカオリ

「G」から触手が伸ばされる

繁殖を行うため、胚を植えつける

ガッ！！

カオリはそれを足元にあつた鉄棒で遮る

「カゲハは・・・あきらめなかった！あの時カゲハはあきらめず戦っていた、私は見ているしかなかったのにカゲハは最後まで戦ってここまで生き残ったのよ・・・なのにわたしは・・・」

「ガアアアア・・・」

触手が何本も伸ばされていく

「11の！11の！」

カオリは鉄棒をブンブン振り回して触手を跳ね返している
「眼」はカオリを見続けている

「11の・・・」

カラン

「これは？」

カゲハは床に落ちてるものを拾う
医療用の道具がたくさん入った女性用のポーチだった。

「カオリのポーチだ」

「じゃあ、あいつはこころへんだな」

「いや・・・こころじゃない」

「なぜだ？」

「こころはどこだかわかるのか？」

「ああ「G」がいた場所だろ」

「ああそうだ、だがもうここに「G」はいない！」

「・・・まあ、な」

カゲハは辺りを見回す

壁には多数の爪跡がありガラスは割れ、多量の血痕が飛び散っている。

そして奥の床に大きな穴が空いていた。

「なんだこれは？」

リヨウは床に広がる黒い染みを見つけた
それを見たカゲハの顔色が変わる。

「・・・感じる」

「え？」

「あいつだ・・・」

「ま、まさか・・・！」

「奴だ・・・」「G」がいたあとだ・・・」

リヨウの顔から血の気が失せていく

「あ……あ……カオリ！」

「落ち着け」

「落ち着けるか!!」

カゲハはリヨウの持つ通信機を指差す

何度も通信を試みたが、頑として応答をせずそれでもリヨウは通信を続けていたのだ。

「！」

通信機が電波を受信しているランプが点いている

「早く出ないと手遅れになるぞ」

「あ、ああ」

「ザ……ザザ……に、兄さん……」

「カオリ!!今どこにいるんだ!?大丈夫か?怪我してないか?」

リヨウは通信機に向かって叫ぶ

「……ザ……あんまり大きな声を出さないで!」

カオリは小声で叫ぶ

「貸せ」

カゲハはリヨウから通信機を取り上げた

「……大丈夫か？」

「……カゲハ……」

「……お前を助けに来た……」

「……！」

「俺に人間的な感情がないのは大きな絶望を知っていたからだ、だがそれはただのおごりに過ぎなかったようだ」

「……そうよ……自分だけ突っ走って、いつ死んでも後悔はないような顔をして……」

カオリの声は若干震えていた

「そっだその通りだ」

カゲハはさらっと言った。

「なっ!?!」

カゲハのあっさりとした答えにカオリは驚きの声を上げる

「……自分が死んでも後悔はしない、だが仲間が死ぬのはもうごめんだ」

「ザ……最初からそう言ってくれれば……ザ……」

「感情を表現するのは難しいがな」

「ザザ……ザ……そんなの……おしえてあげるわよ……ザザザ」

カゲハは電波の悪さに首をかしげる

「どうしたんだ？今おまえはどこにいるんだ？」

「ザザザ……ぎりぎりの……ザ……で……ザザ……地下に落ちて……ザザ……の……ザザザ……に……いる……」

「チツ聞こえづらい！地下のどこだ？」

「ザザザザ……床……ザザザ……に……ザザ……が……ザザザザ……」

「床？……」

カゲハはあたりを見回す

奥のほうに大きな穴があいている

「！あれか……わかった今すぐ向かう！」

「ザ・・・助けに来て！！カゲハ！兄さん！・・・ザ・・・ザーーーーー」

「急いだほうがよさそうだ」

「ああ、早く行こう！！カオリが待ってる！！」

「待て！！」

だが走るリヨウの腕をカゲハは掴む。

カゲハはリヨウを引き戻した。

「なにを・・・！？」

バキッ

抜けた床から黒い触手が飛び出していた

「！？」

「気をつけるよ、奴は予想以上に進化しているかもしれない」

カゲハは触手に向かっていった

数十本にもおよぶ触手はカゲハに狙いを定める。

ズガン！！

触手に散弾が撃ち込まれた
猛烈なパワーによって触手は粉々に吹き飛ばされ、破片が床に飛び
散る

「おお！」

リヨウは絶賛の声をあげる

「まだまだ」

残った触手が超スピードでカゲハに向かっていく
カゲハはナイフを取り出した

バラバラに向かっていった触手をすべてギリギリでかわし、一本ず
つ切断していく
その身のこなしは人間の域を超えていた

「すごいじゃないか、カゲハ」

「そいつのおかげでナイフは得意になった」

ナイフの刃先をイプシロンに向ける

イプシロンはナイフを突きつけられているにもかかわらず微動ただ
にしない

「さて、この床を降りなきゃいけないのか・・・」

「ここはどこにつながっているんだ？」

「・・・ここは死体廃棄処理場だ」

「なるほど」

カゲ八は抜けた床をのぞく

薄暗い明かりの中、金網状の足場がありちょうど床が抜けたところが広いスペースとなっていて巨大ななにかがそこへ落ちた痕跡がある奥には鉄でできた階段があり、そこから果てしなく地下へ

鼻につんとくる死臭は地獄にふさわしい場所でもあった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1036y/>

BIO HAZARD evolutionbreak[DEAR FILE]

2011年11月16日02時09分発行